

新撰文

4
1441
1



氣元奇峰雲外
 浮天風吹丘絕巔
 秋山河厝藪鞋下
 但蒼古斷一樓
 存全
 劫
 卷
 洲

言
遂於內科。察病之術精
微不遺。今所譯診斷捷
徑。足以見其一斑也。嗚呼
學不精則不悉。志不篤
則不達。如玄卿者。料其
所詣誠可畏哉。玄卿請

一言。遂書以與之。

明治十一年二月

東京大學醫學部教授
桐原真節撰

光緒四年歲次戊寅元月

浙東琴仙王藩清書

印

リニセウニテルツフングラント、ジアクノ
 一七ノ病床検査及鑿識ノ第三板ニ増補スル者
 ニシテ初二先ツ察病ノ次第ヲ説キ各病自家
 ノ症候ニ及フ其文極メテ簡約而ノ其説最モ
 警新ナリ實ニ現今畧普通ノ學課ヲ卒ヘ實驗
 ヲ良師ニ叩フノ暇ナキ者或ハ僻陬寒郷ニ在
 テ病床真否ノ決ヲ大方ニ仰ク能ハサル者ニ
 示サハ其裨益少カラス因テ自ラ淺劣ヲ忘レ
 登院ノ餘暇譯シテ數卷ヲ得タリ然レ氏此書
 ノ如キ瑣瑣タル小冊子ニメ固ヨリ完全ノ者

ニアラス讀者宜ク診断ノ捷徑トナシテ可ナ
 リ

一 輓今醫學ノ進歩スルニ從ヒ篇中徃徃先哲ノ
 譯例ナキ文字ヲ現出ス余ノ淺學素ヨリ穩當
 ノ譯字ヲ下シ得ス故ニ原語ヲ存シテ注解ヲ
 加ヘ或ハ擬譯ヲ傍ラ原字ヲ附シ以テ後哲ノ
 的譯ヲ俟ツ

一本篇中秤量ノ如キハ方今專ラ通用スル所ノ
 瓦蘭瑪量ヲ用ユ其舊氏量及本邦秤量トノ以
 較ヲ知ラント欲スルモノハ別ニ其書アリ宜

ク就テ看ルヘシ

一篇中驗温器ハ盡セルシウス氏ニ據ル他家ノ
器ト混同スル勿レ

明治十一年一月

東京大學醫學部助教 岡玄卿識

診斷捷徑卷之一 目次

○開緒

〔壹〕通論

〔三〕疾病

〔三〕症候

〔四〕自覺症候

〔五〕他覺症候

〔六〕確徵

〔七〕反對取徵

〔八〕鑒識

〔九〕病體檢查

〔十〕他覺檢查

〔十一〕摘除鑒識法

〔十二〕預後

〔十三〕持續經過轉歸

〔十四〕反復檢查ノ要訣

〔十五〕病體解剖

○總論

〔十六〕病床檢查

〔十七〕現症ヲ確定スルノ法

〔三八〕視診
〔三九〕觸診
〔四〇〕測診

卷之二目次

〔九〕簡約理學的診斷
〔一〇〕驗溫及熱論
〔一一〕打診
〔一二〕聽診
〔一三〕咯痰論
〔一四〕出血論

卷之三目次

〔一五〕檢尿論
〔一六〕尿異常性分
〔一七〕尿尿常性分
〔一八〕尿尿異常性分

〔一九〕尿尿異常性分
〔二〇〕尿尿異常性分
〔二一〕尿尿異常性分
〔二二〕尿尿異常性分

〔二三〕簡約化學的檢査
〔二四〕特異化學的檢査附 糖尿簡易定量法

卷之四目次

○病床檢査，通説

〔九〕患者ノ位置
〔一〇〕既往症
〔一一〕初發症候ヲ探ル

〔一二〕局部症狀ヲ得ル
〔一三〕現症
〔一四〕神經系景況

〔一五〕筋ノ景況
〔一六〕關節ノ景況
〔一七〕頭部ノ景況

〔一八〕脊柱ノ景況
〔一九〕頭部ノ景況
〔二〇〕心臟及血行機ノ景況

〔二一〕呼吸器ノ景況
〔二二〕皮膚一般ノ景況
〔二三〕消食器ノ景況

〔二四〕泌尿器ノ景況
〔二五〕胸腔及內器ノ景況
〔二六〕消食器ノ景況

〔二七〕泌尿器ノ景況
〔二八〕胸腔及內器ノ景況
〔二九〕消食器ノ景況

〔三〇〕泌尿器ノ景況
〔三一〕胸腔及內器ノ景況
〔三二〕消食器ノ景況

〔三三〕泌尿器ノ景況
〔三四〕胸腔及內器ノ景況
〔三五〕消食器ノ景況

百三 心及大血管聽診上，說

百四 心諸口及瓣膜，位置

百五 下腹，各部

百六 腹部一般，景况

百七 腹腔內蓄液上位，經界

百八 腹水及卵巢水腫ニ於ケル諸徵，區別

百九 肝臟，位置

百十 肝臟，檢查

百十一 胃，位置

百十二 胃，檢查

百十三 胃，觸診

百十四 幽門，觸診

百十五 腸，檢查

百十六 腸，觸診

百十七 大腸，觸診及打診

百十八 肛門，檢查

百十九 脾臟，位置

百二十 脾，檢查

百二十一 脾，位置

百二十三 脾，檢查

百二十四 腎臟，位置及檢查

百二十五 尿道，位置及檢查

百二十六 膀胱，位置及檢查

百二十七 卷之五目次

○病床檢查各論

第二 肺若クハ肋膜病，諸徵

百二十八 急性胸器病

百二十九 慢性胸器病

百三十 鑒識ノ順序

百三十一 氣管支炎

百三十二 肺炎

百三十三 慢性肺結核

〔夏〕氣胸

〔夏〕肺氣腫

〔夏〕肋膜炎

〔夏〕胸水病

〔第二〕心若クハ大血管病ノ諸徴

〔夏〕有熱性心臟病

〔夏〕無熱性心臟病

〔夏〕鑒識ノ順序

〔夏〕急性心外膜炎

〔夏〕急性心筋質炎

〔夏〕急性心内膜炎

〔夏〕心囊水腫

〔夏〕慢性心筋質炎

〔夏〕心臟肥大
(甲)左室
(乙)右室

離軸肥大
離軸肥大

〔夏〕慢性心筋質炎

〔夏〕心臟乏養

〔夏〕心臟脂肪變性

〔夏〕心臟器質缺損

〔第二〕僧帽瓣膜ノ器質病

〔甲〕僧帽瓣膜ノ不全
〔乙〕左靜脈口ノ狹窄
〔丙〕瓣膜不全ニ狹窄ヲ兼ヌルモノ

〔第三〕大動脈瓣器質病

〔甲〕大動脈瓣ノ不全
〔乙〕大動脈口ノ狹窄
〔丙〕瓣膜不全ニ狹窄ヲ兼ヌルモノ

〔第三〕三尖瓣ノ器質病

〔甲〕三尖瓣ノ不全
〔乙〕右靜脈口ノ狹窄

〔第四〕肺動脈瓣ノ器質病

〔甲〕肺動脈瓣ノ不全
〔乙〕肺動脈口ノ狹窄

〔夏〕大動脈跳血囊

〔第三〕腹部各器病ノ諸徴候

〔夏〕胃諸病

- 〔頁八〕急性性胃加答兒
- 〔頁八〕慢性胃加答兒
- 〔頁九〕穿穴性胃潰瘍
- 〔頁九〕胃癌
- 〔頁九〕腸管諸病
- 〔頁九〕急性性小腸加答兒
- 〔頁九〕慢性小腸加答兒
- 〔頁九〕穿穴性十二指腸潰瘍
- 〔頁九〕盲腸炎及其外圍炎
- 〔頁九〕直腸炎及其外圍炎
- 〔頁九〕直腸癌
- 〔頁九〕蛔蟲
- 〔頁九〕箱頓腸脫、腸振環及インワギナチラン
- 〔頁九〕肝臟及胆道諸病
- 〔頁九〕肝臟組織間結締織炎〔硬縮、顆粒肝〕
- 〔頁九〕膿潰性肝炎〔肝膿瘍〕

- 〔頁九〕急性性肝臟黃色乏養
- 〔頁九〕肝癌
- 〔頁九〕肝臟脂化
- 〔頁九〕肝胞蟲
- 〔頁九〕門脈トロンボシ
- 〔頁九〕膿潰性門脈炎
- 〔頁九〕肝生黃疸
- 〔頁九〕血生黃疸
- 〔頁九〕胆石
- 〔頁九〕腹膜諸病
- 〔頁九〕腹膜炎
- 〔頁九〕腹水
- 〔頁九〕脾臟諸病
- 〔頁九〕急性性脾腫大
- 〔頁九〕慢性脾腫大
- 〔頁九〕腎臟諸病
- 〔頁九〕急性腎臟諸病
- 〔頁九〕慢性腎臟諸病
- 〔頁九〕腎臟鱗血
- 〔頁九〕急性腎臟組織質炎
- 〔頁九〕慢性腎臟組織質炎
- 〔頁九〕急性腎臟組織質炎
- 〔頁九〕慢性腎臟組織質炎
- 〔頁九〕急性腎臟組織質炎
- 〔頁九〕慢性腎臟組織質炎

- 〔三〕慢性腎臟組織間結締織炎附 尿毒
- 〔三〕腎臟澱粉樣變質腺脂〔三〕遊走腎及變位
- 〔三七〕アッソン氏ノ病 〔三〕腎盂腎蓋及尿道諸病
- 〔三〕腎盂腎蓋ノ炎及腎痛コロツ
- 〔三〕膀胱病 〔三〕膀胱加答兒
- 第四皮膚病
- 〔三〕急慢二性ヲ論ス 〔三〕原形
- 〔三〕急性傳染發疹 〔三〕急性不傳性ノ發疹
- 〔三〕慢性皮膚病 〔三〕爾他皮膚諸病
- 第五 腦及其衣膜諸病ノ徵候

- 〔三〕腦及其衣膜諸病 〔三〕其急慢二性ヲ論ス
- 〔三〕其官能障礙 〔三〕知覺亢進症
- 〔三〕知覺抑壓症 〔三〕運動亢進症
- 〔三〕運動抑壓症 〔三〕迷走神經ノ刺戟症
- 〔三〕迷走神經ノ麻痺症 〔三〕精神興奮症
- 〔三〕精神抑壓症 〔三〕官能障礙ノ種類
- 〔三〕腦穹窿、腦節、及大腦脚ノ諸症
- 〔三〕半身不遂症
- 〔三〕シルウ井ス溝ノ症状
- 〔三〕腦底諸病ノ症状

- 〔五〕偏腦病
- 〔五〕患部的徵
- 〔五〕腦底膜炎
- 〔五〕腦中風
- 〔五〕シルカ井ス溝動脈ノエンボリ
- 〔五〕腦及其膜ニ生スル腫瘍
- 〔五〕腦質炎〔腦ノ膿瘍〕
- 〔五〕慢性腦水腫
- 〔六〕脊髓及其衣膜病ノ諸徵候
- 〔五〕熱性脊髓病
- 〔五〕運動元進症
- 〔五〕症候ノ區別
- 〔五〕兩側官能障礙
- 〔五〕腦穹窿膜炎
- 〔五〕流行性腦脊髓膜炎

- 〔五〕運動抑壓症
- 〔五〕知覺抑壓症
- 〔五〕兩側不遂症
- 〔五〕慢性脊髓膜炎
- 〔五〕慢性脊髓炎
- 〔五〕神經末梢諸病徵候
- 〔五〕神經末梢諸病
- 〔五〕偏頭痛
- 〔五〕一般神經病
- 〔五〕癲癇
- 〔五〕知覺過敏症
- 〔五〕協同機能障礙
- 〔五〕急性性脊髓膜炎
- 〔五〕急性性脊髓炎
- 〔五〕脊髓勞
- 〔五〕顏面痙攣
- 〔五〕子癇

目次
〇七
同式載反

- 〔五〕破傷風
- 〔六〕舞蹈病
- 〔九〕特發筋瘦削
- 〔元〕蔓延性筋瘦削
- 〔元〕振顫性不遂
- 第九 中毒論
- 〔五〕中毒症
- 〔六〕酒客譫妄
- 第十 全身病ノ諸徴
- 〔元〕全身病
- 〔六〕テタニー
- 〔六〕ヘステリー
- 〔五〕延髓球麻痺
- 〔五〕原發散在硬化
- 〔五〕鉛中毒
- 〔元〕傳染及不傳染病

- 〔元〕急性傳染病
- 〔五〕動物ヨリ感スル傳染病
- 〔五〕急性不傳染病
- 第二 急性傳染諸病
- 〔五〕急性發疹
- 〔五〕猩紅疹
- 〔五〕類麻疹
- 〔五〕間歇熱
- 〔五〕田歸熱
- 〔五〕發疹室扶私
- 〔五〕慢性傳染病
- 〔五〕慢性不傳染病
- 〔五〕痘瘡
- 〔五〕麻疹
- 〔五〕水痘
- 〔五〕腸室扶私
- 〔五〕虎烈刺

言出抄後

臨川雜記

〔一〕類虎烈刺

〔一〕虎烈刺状室扶私

〔二〕赤痢

〔二〕流行性腦脊髓膜炎

〔三〕腐敗熱

〔三〕膿毒

第二慢性傳染諸病

〔一〕梅毒通論

〔一〕後天梅毒

〔二〕遺傳梅毒

第三動物ヨリ感スル傳染諸病

〔一〕トリヒ子蟲

〔一〕恐水病

〔二〕脾脫疽

第四急性不傳染諸病

〔一〕劇性感冒

〔一〕急性關節痲痺瘧私

〔二〕急性痛風

第五慢性不傳染諸病

〔一〕萎黃病

〔一〕壞血病

〔二〕腺病

〔二〕白血病

〔三〕ラヒチス

〔三〕蜜尿病

〔四〕肉糖尿病

〔四〕尿崩

新刊建經

目次

〇九

刊行版

眼不明ノ如スル他覚
光

從面色以或ニハ出之他
他覚計ノ如ク用之



言部持卷一
氏

四

メ其症候ニ自覺ト他覺トノ別アリ
自覺症候 レヨクエクチー
フ、レシテトーム トハ患者自覺ノ變常ヲ自ラ
感覺スル者ニメ疲勞、壓重、緊張、疼痛等ノ如キ是
ナリ此症候鑿家ノ未タレモ切要ノ件トナサ、
ル者ハ屢之ヲ缺如スルトアレハナリ例之ハ小
兒ニ於ケルカ如シ
他覺症候 ヲエチー
レシテトーム トハ鑿士ノ識官 眼、耳、
觸、神 二由テ
能ク辨知レ得ル者ニメ或ハ諸般ノ器械 耳鏡、
鏡、頭鏡、子宮鏡、驗温器、顕微、
鏡、化學的ノ試驗藥及器械 媒介ヲ要スル
アリ此症候ハ各箇器官ノ機能障礙及理學的變

六

化 位置、形、
状、色、等 ヨリメ起ル者ナリ
確徵 バトグ、
レシテトーム トハ各病必見ノ正徵トナルヘキ
一定ノ病状ヲ確表スル症候ヲ曰テ例之ハ鏡鋪
色痰ノ肺炎ニ於ケルカ如シ
反對取徵 ネガチーフ、
レシテトーム トハ某症ハ某病ニ發セス
彼病ニ此症ヲ現ワサル等ヲ以テ診定スルヲ
謂フ腸室扶私ノ唇ヘルペスノ如キ 甚タ稀ニ
之
アルモ亦以テ破 是ナリ
格トナスヘシ
鑿識 レアガ
ノ、レセ トハ病ノ現症ニ就テ其性状ヲ識列ス
ルノ術ヲ謂フ故ニ鑿識ヲ行フニハ先ツ發現ス

七

八

〇二
氏

九
 左ノ二件ヲ簡要トス
 鑒識ニ先テ施スヘキ者ハ患者ノ検査法ニシテ
 ル者ニアリ例之蜜尿病ノ如キ是ナリ
 ノミヲ以テ病性ヲ定ムル者ニメ此鑒識ヲ要ス
 ルハ其解剖的ノ變化如何ヲ詳ニスルヲ能ワサ
 又症候的鑒識ト名クル者アリ是唯顯著ノ症候
 メ病性ヲ定ムル者アリ之ヲ解剖的鑒識ト謂フ
 シ其病的ニ由テ起リタル器質ノ解剖變化ヨリ
 ル所ノ源ニ遡リ而メ後其病ノ所在ヲ確定スヘ
 ル所ノ数多ノ症候ヲ聚メ其統緒ヲ尋ネ由テ来

一ハ病歴ヲナム即チ既チ往チ症ヲ按シ兼テ患者生活ノ現
 況職業貧富等嘗テ病ニ罹ルノ有無及血族等ヲ詳
 問スルナリ
 二ハ他覺検査ニ由テ以テ其現症ヲ詳悉スル
 者ナリ此二件ヲ以テ鑒識ヲ得ルヲ自然法ゲ手
 ト謂フ又一法アリ先ツ他覺検査ニ由テ其
 現症ヲ詳ニシ兼テ視診ヲ以テ各部ノ解剖上
 造構ト諸系統官能ノ變常トヲ看破シ而メ後
 初テ病歴ヲ訊問スル者ニメ之ヲ分析法アナリ
 ト謂フ

十

現症<sup>スタトス、
レセンス</sup>ヲ確實ニ診定シ得ルノ要訣ハ諸種
ノ系統ニ就テ他覺檢査ヲ行フニアリ令其各系
ニ從テ之ヲ七種ニ區別ス

〔一〕精神及身軀上ニ顯ワル、一般ノ景況
〔二〕神經系
〔三〕血行系
〔四〕呼吸器
〔五〕皮膚
〔六〕乳糜及泌尿器
〔七〕生殖器

但各箇ノ器官ニ就テ檢査ヲ遂クヘキ順序ノ
如キハ即チ各種ノ病症ニ由テ定ムル所ニメ
只其病ニ感スル局部ヲ檢査スルヲ以テ是レ
リトセス常ニ全身諸部ニ關涉シ精細ニ穿鑿

十一

病者ヲ精細ニ檢レテ初テ得タル所ノ諸徴ヲ以
テ直ニ其病ノ性質ヲ決定スルヲ能ワサルカ或
ハ其侵襲セラル、器官ヲ明辨スルヲ得サル片
ハ更ニ摘除鑿識法<sup>アウスメニユリツメク、
ツールレフクイセ</sup>ヲ行フヘレ此鑿
識法ハ其現在スル症候ノ其病ニ確切ナラサル
者ハ之ヲ除キ隨テ其病ト其症ト適合スル者ヲ
得テ初テ之ヲ決斷スル者ナリ然レ今一病ヲ鑿
識スルニ當テ其適合セサル症候ト雖モ或ハ之
ト合併スヘキ者アリ之ヲ診定スルハ全ク歴驗

診新集

卷之二

四

周大猷反

言出... 卷之二

ニアリ假令ハ心臟病者ノ結核症ニ陥ル極テ
稀ニ腸室扶私ニ唇ヘルベス胞叢ヲ發スルモ亦
大ニ稀ナル等ノ如キ是ナリ若シ之ヲ發スル
アルモ素ト例外ニシテ肺炎及急性腸加答兒ニ
ハ屢見ル所ノ症ナリ

十一

鑒識ニ次ク者ハ預后プログヲ審定スルナリ其次
ヲ治療トラトス的藥(インテリ)ヲ配シ云○預後ト
ハ疾病變動ノ機ヲ察シ其經過ト轉歸ヲ預定ム
ル者ニメ之ヲ區別スレハ曰ク吉曰ク凶曰ク吉
凶相半スルナリ夫預后ニ就テ吾人ニ其吉凶ヲ

十二

判知スヘキ標目ヲ舉レハ即チ患者ノ躰質年齢
及病ヲ受クル器官ノ貴重ナルヤ否ヤト病ノ性
質ト之ニ合併スル諸症且ツ偉効ヲ収ムヘキ治
方ノ有無其他流行病ナレハ其性質ニ關スル者
ナリ故ニ預后ヲ定ムルハ精細ニ注意セシムハ
アルヘカラス
各種ノ病ニ於テ皆之ニ持續エルト經過ウルト轉
歸アウスガシヲ區別シ持續ノ長短ニ從テ其病ヲ再ヒ
分テ急性慢性トナス通常無熱症ヲ以テ慢性ト
スレモ慢性症必シモ熱ナレト謂フヘカラス屢

診新... 卷之二 〇五 同人藏版

慢性病ニシテ熱ヲ兼有スル者アリ加之ナラス
慢性病ト稱スルハ急性数症ノ相聚合シテ成ル
者ナリ又病ノ持續スヘキヲ知ルハ其原因ノ性
状ト侵襲ノ模様ヲ以テスルアリ都テ病ニハ
各其一定ノ經過ヲ具有セサルハナシ而メ其經
過ハ病ノ性質ト病機ノ恢復スル模様ニ順フ者
ナリ常ニ屢目撃スル者ハ病勢ノ増減ニメ間時
期ヲ約スル者アリ是殊ニ急性發疹ニ於テ見ル
所ナリ
病ノ初起ハ卒然發スル者アリ
中風 創傷 毒瘰癧 肺炎 等

徐々ニ發スル者アリ通常ハ徐々ニ發スル者最
モ多シトス然リ而メ病ノ未タ其確症ヲ發現セ
サル間ヲ名テ前兆期スタジウム或ハ前ロドロマリスト曰ヒ之ニ
次ク所ノ期ヲ進罷期スタジウム巔頂期スタジウム減退
期スタジウム回復期スタジウム等ニ區別セリ但許
多ノ病ニ於テ病勢ノ極度ト減退トノ間間不明
ノ時期アリ之ヲ不明期アンヒホーレト曰フ
急性分利期クリトハ病勢ノ迅速四字ヨリ三ニ治
癒ニ赴ク者ヲ謂フ減温ハ氏二度乃至五度ヲ
減レ脈搏ハ二十乃至六十搏

タル血液變調及毒物外ヨリ侵入スル者及ニヨ
排泄物ノ鬱蓄ヲ曰フル第二器頂ノ變内臟破裂及痿痺、炎証、多量滲出
 物ノ壓迫胸水、肺水腫等ニ基ク者ナリ
 死亡ハ急劇ニ來ル者アリ或ハ諸器ノ麻痺ニヨ
 リテ生スル諸症所謂アゴニ一戰ヲ發シテ漸々
 來ル者アリ

五

病ノ經過中其變化ノ景況ト治法ノ効績トヲ精
 察熟考メ詳ニ之ヲ記取セン一ヲ要ス是レ鑿士
 ノ勉メテ日課トナスヘキハ言ヲ竝タス其症ニ
 隨テ一日尚數回反復メ記録セスンハアラス

五

患者若シ不幸ニメ死亡ノ轉歸ヲ取ル時ハ可及
 的病家ニ說諭シテ其屍ヲ請求シ之ヲ解剖檢視
 セン一ヲ要ス是患者生前ノ顯症ヲ來ス所以ノ
 理ヲ證據シ且ツ我カ耳目ノ及ハサル所ヲ確明
 ナラシメ以テ向來患者ノ為ニ幸福ヲ冀フハ我
 カ鑿ノ要務ニアラスメ何ソヤ故ニ生前ニハ百
 方治術ヲ盡シ死後解屍シテ其病理ヲ究極シ然
 ル後始テ鑿務ヲ盡クセシ者ト謂フヘク又之ニ
 由テ既ニ定メ得タル所ノ鑿識ヲ十全ナラシメ
 且ツ其死ヲ來ス所以ノ原因ヲ知ルニ的實ナル

言論持往 卷之一

一之ニ勝ル者ナキヲ以テナリ

○通論

病者ヲ検査スルノ法ニアリ第一既往症アチム子九九章百章百五ヲ明ニシ第二現症スタトスブ十八七章ヲ参考セヨヲ明ニシ第三現症レセンスリ九考セヨヲ認ムル是ナリ

現症ヲ明瞭スルニハ左ノ條件ニ由ル

其一視診甲ハ病体上検査乙ハ分泌及排泄物
第三章ヲ見ヨ

其二觸診 其三測診 其四打診

其五聽診 其六驗温 其七分秘及排泄

六

七

物ノ顕微鏡上検査

其八分泌及排泄物ヲ化學的ニ検査スルナリ
八十四章ヨリ九十
六章ヲ照考スヘシ

○視診インスマ
クナラン

甲 病體上ノ檢法

第一患者ノ精神及身軀上ノ現象ニ注意スヘシ
即チ活潑ニメ穎敏ナルカ將々痴鈍ナルカ或ハ
真摯ナルカ或ハ鬱悒スルカ猜忌ヲ帶フルカ或
ハ聰明ニメ柔仁ナルカ果勇ニメ和順ナラサル
カ或ハ飲酒若クハ他ノ原因ニヨリ一時興奮セ

診新捷徑

卷之一

。九

同代藏反

充

ラ、カ或ハ過飲メ全ク沈酣スルカ或ハ狂譟
スルカ容姿温籍ニシテ五官ニ妨ケナキカ或ハ
異想ヲ生メ眼前ノ怪物ヲ捉ルノ状ヲナスカ肌
膚汚穢シテ榮養不良ヲ表スルカ或ハ清淨ニメ
滋養ニ富メルカ等ヲ熟察スル者ナリ
以上述ル所及其他異状ヲ呈ハスニ於テハ醫士
ノ容易ニ之ヲ亮察シ得ヘキ者ナリ縱令爾他貴
重ノ診候数多アルモ此法ヲ以テ度外視スル
勿レ
病床ニ臨テ患者ノ位置形状ヲ檢視センニハ先

腹大、ノ恙者、何トハ形、
カカ

ツ患者ノ仰臥スルカ側臥スルカ若シ側臥スル
ル或ハ其臥位ヲ側仰ノ間ニ取ルカ或ハ俯臥ス
ルカ面臥スルカ其他什麼ナル形状ヲナスカヲ
詳ニスヘシ但シ屢々其常習ニヨリ一異ノ位置ヲ
取ル者アレハ亦此ニ注意セスンハアルヘカラ
ス
凡ソ身軀ノ諸部ヲ精細ニ検査セント欲スルキ
ハ即チ頭部肩胛軀幹及四肢ヲ各別ニ諦視セス
ンハアラス例之ハ頭ヲ前方ニ屈スルカ或ハ後
方ニ傾クルカ或ハ癱瘓シテ運動機遏止スルカ

診察法
卷之二
十
同
載
反

或ハ平ニ仰臥スルカ俯臥スルカ四肢勁直ナル
カ將夕學縮スルカ或ハ弛緩スルカ緊張スルカ
其他各異ノ形状ヲ詳ニスヘシ
右ニ論載スル患者ノ位置ハ神經性病ニ由ルカ
或ハ虚脱ナルカ將夕全身衰弱及麻痺ニ由ルカ
或ハ痙攣或ハ牽縮其他ノ病性ニ起因スルカヲ
概略判決シ得ヘキ者ニメ間、熱性病者ニ於テハ
某ノ位置ヲ以テ某ノ病ニ確實ナル一徴トスヘ
キ者アリ例之ハ室扶私、腹膜炎、肋膜炎、心囊炎ノ
如キ是ナリ

三

患者ノ容姿ニ就テハ其軀ノ肅然タルカ將夕慢
然タルカヲ注目スヘク又其行歩ニ就テハ頭部
及上半身ノ前方ニ傾倒スルカ又能ク止踏ニ得
ルカ若クハ跟々タルカ壓踏スルカ或ハ地ヲ踏
ムニ其足ヲ放擲スルガ如キカ又ハ地ニ度クカ
ヲ注目スヘク夫ノ疾歩病顛振性廣痺不有無
モ亦注意スヘシ
顔面一樣ニ赤色ナルカ或ハ淡白ナルカ或ハ頰
部ニ潮紅スルカ勞瘵、肺炎ニ於又赤色斑点ノ有
無且ツ其斑点ノ現ワル、部何處ナルカ又ハ疹

三

診新捷徑 卷之一 〇十一 周氏藏反

言出持符 卷之一

ヲ發スルカ或ハ全顔褐色ナルカ或ハチアノ
セ^{蒼青}色ヲ呈スルカ或ハ鉛色ナルカ或ハ櫻色ナ
ルカ或ハ顔色慘淡タルカ或ハ肥豊ナルカ或ハ
浮腫ヲ帶ルカ或ハ面良羸瘦スルカ或ハ面骨此
立スルカ或ハ虚脱スルカ皮膚乾燥スルカ濕潤
ナルカ或ハ灼熱スルカ厥冷スルカ又眼目ニ就
テハ焮赤スルカ溢血スルカ潤大ナルカ突出ス
ルカ光輝アルカ莊銳ナルカ階没スルカ光澤硝
子ノ如キカ瞳孔散大スルカ縮小スルカ斜視ス
ルカ結膜ニ黄色ヲ帶フルカ視力整正ニメ倬望

アルカ如キカ或ハ猛銳ニメ奮怒ヲ帶ルガ如キ
カ或ハ恟慄シテ諸慾ヲ絶スルガ如キカ將々無
カナルカ其他鼻唇ノ離裂延長スルカ又ハ顔面
諸筋ノ運動ニ變ナキカ^{之ヲ檢スルニハ頰ヲ吹}
ナル^{嘔セシメ}口唇開大スルカ閉鎖スルカ口角牽引スル
カ低下スルカ又口唇齒齦及舌背露出スル等ヲ
見ル片ハ其常態ナルヤ或ハ異物ヲ布スルヤヲ
精察スヘシ又全顔ノ扶良安静ナルカ將々舌ヲ
サレカ又ハ無心ナルガ如キカ骨騰トシテ夢裡
ノ如キカ將々恍惚タルカ或ハ猛威アルカ憤懣

珍所捷徑 卷之一 〇十二 司載反

言出推後 卷之一

スルカノ諸徴ヲ一々者破セムンハアラス
夫面良ヲ以テ病ヲ察スルハ鑿ニ於テ最モ須要
鉄クヘカラサル者ニメ那ノ容良ハ那ノ病ノ確
証トナリ鑿識ニ於テ規律トナスヘキ者アリ宜
クヒポカラテス氏ノ顔容此顔容ハ眼窩陷凹頰肉脱落顴骨著ク突出
ヲ曰フ者ヲ以テ証ヲ取ルヘシ其状タルヤ固ヨリ
一語ノ之ヲ形容シ得ヘキ者ニアラスト雖モ一
回之ヲ目撃スル片ハ判然會得シテ終身忘却ス
ルコトナク預后ニ於テ其關係最モ大ナル者トス
故ニ看護者ノ初メ此病ニ因テ不幸ニ陥ルナキ

三

ヲ思惟スルモ一回此状良ヲ現ワスニ至ル片ハ
其死期近キニ迫ルヲ明徴シテ誤ラサルト屢之
レアリ
呼吸ニ雜音ヲ帶ヒスメ尋常ナルカ大人ハ凡ソ呼吸數一分
時間十二回乃至二十回乳兒ハ四十或ハ有力ナ
四小兒ハ二十六ヲ以テ中等トス
ルカ深吸スルカ整調ナルカ平穩ナルカ或ハ疾
速ナルカ高音ヲ發スルカ短キカ間歇アルカ不
整ナルカ困難ナルカ不全ナルカ或ハ鼻息スル
カ口息スルカ或ハ鼻翅顫動スルカ呼吸困難或ハ
咳アルカ鼾息スルカ馨咳スルカ會嗽音ルンゲヲ

呼吸困難 〇十三

診法 卷之一

存スルカ其他異常音ヲ發スルカ或ハ呼氣惡臭
ヲ帶ブルカ或ハ呼吸困難ノ際ニ口外へ泡沫ヲ
噴出スルカ或ハ咳嗽ニ次テ咯痰スルカ或ハ舌
エサルカ又痰ノ性質ルカ無形ナルカ少キカ流動ナ
カ膠状ナルカ凝塊ヲナスカ或ハ無色ナルカ白
色ナルカ灰白色ナルカ黄色ナルカ綠色ナルカ
鏡鏽色ナルカ赤色ナルカ褐色ナルカ黒色ナルカ
カ或ハ腐敗スルカ膿球血球ヲ混在スルカ或ハ
寄生物又ハ菌徴如何ヲ檢視スヘシ
皮膚ヲ撿センニハ其現色ト弾カト温度及分泌
物ヲ審視セスニハアラス第一皮膚ハ赤色ナル
カ淡白色ナルカ温暖ニシテ乾燥スルカ或ハ劇

三



熱 カロールモル アルカ或ハ涼冷温潤ニシテ粘汗ヲ帶
ルカ或ハ柔軟ナルカ或ハ撓性アルカ滑澤ナル
カ或ハ硬固ナルカ羊皮紙ベルカメノ如クナルカ離
裂アルカ鱗屑状ニ剝離スルカ爆裂スルカ或ハ
粟肌ノ有無等ヲ注目スヘシ例之ハ皮膚ノ透明
玲瓏ナル人及多血家ニ於テハ赤色ヲ呈シ貧血
家及痿黄病者ハ蒼白ニメ蠟ノ如ク血水病ヒドレ
ノ人ハ穢白色トナリ癌性ノ人ハ灰白色ニメ乾
土ノ如ク黄疸及膿毒病ニ於テハ黄色ヲ呈ワレ
肺氣腫及心臟病者ニ於テハ蒼青色ヲ發シ硝酸

診法 卷之一 〇十四

銀ヲ長服セル人ハ灰白色ニ變シ榮養減損シテ
 脂肪ニ乏シキ人ハ弛緩且ツ脆弱ニシテ雖襞ヲ
 生ス虎列刺ニ於テハ雖襞依然トメ存レ蜜尿病
 ニ於テハ乾燥シ又チアノーゼ^蒼貧血及血水病
 ニハ常ニ熱温下降スルヲ見ル但熱アルキハ温
 度從テ上昇スルハ言ヲ竝タス
 又分泌物ハ過饒ナルカ或ハ全ク缺乏スルカ又
 全身ナルカ或ハ局處ナルカ其化學的性質如何
 又發汗スル者ハ其晝夜ノ時期ヲ知り發疹アル
 片ハ其性状^{斑點ナルカ攢簇融合スルカ結節狀}
^{隆起スルカ水泡ナルカ膿泡ナル}

カ^ハハ^ハヘル^ル疹^{或ハ}クワ^{デル}疹^{狀ナルカ}又
 散布ノ景況ヲ詳ニシ且ツ斑點ノ壓抵ニ由テ消
 散スルヤ否ヤヲ驗スヘシ或ハ汗疹アルカ紫斑
 アルカ血線刺^{エキスコリアチヲ}表^皮剥^離アルカ
 或ハ裂創アルカ潰瘍アルカ壞疽アルカ靜脈努
 脹スルカヲ精驗スヘシ
 皮表ヲ視診スルハ鑿家ニ於テ必ス杜撰ニ屬ス
 へカラサル者ニメ病院ハ勿論往診鑿流モ亦宜
 ク之ヲ勉ムヘキ者トス
 乙 分泌及排泄物ノ視診ハ咯痰出血尿検査ノ條

珍新捷徑 卷之二 〇十五 岡代藏反

言出抄行 卷之二

下ニ於テ詳説スヘシ八十四章ヨリ九

○觸診バルバ
チラン

觸診ハ視診ヲ補助シテ躰中諸部ノ異常ヲ知ルニ須要ナル者ニメ即チ其形状大小及運動ノ景况硬軟ノ度其他感覺ノ度躰温及脈搏ノ形状モ亦皆此法ニ由テ詳察スルヲ得ル者ナリ故ニ之ヲ行フニハ両手或ハ指頭一指或ハ數指ヲ以テ抵觸スヘシ加之ナラス又空竇ヲ有スル部位ハ指ヲ挿入シテ之ヲ檢スルアリ
體温人身躰ハ攝氏三十六度二分半乃ヲ檢ス至三十七度五分ヲ以テ常温トス

四

五

ルニハ醫士手掌ヲ輕ク患者ノ前額或ハ頰上ニ貼シ或ハ患者ノ手掌ヲ把握シ并ニ外氣ニ觸接セサル部胸壁ノ側傍及腹上ニ於テ試ムヘシ蓋シテ手ヲ用ヒテ肌熱ヲ知ルノ法ハ以上述ルカ如シト雖モ常ニ練熟スルニアラサレハ能ハス縱令能ク習熟シ得ルモ只其槩略ヲ了察スルノミニシテ其精細ニ至ツテハ固ヨリ測定スヘカラス故ニ尋常驗温器ノ一度ヲ十分シ或ハ五分シタル者ヲ以テ舌下、腋下、肛門、或ハ腔内ニ十二分乃至十五分時間挿置シテ檢スル片ハ之ヲ確定

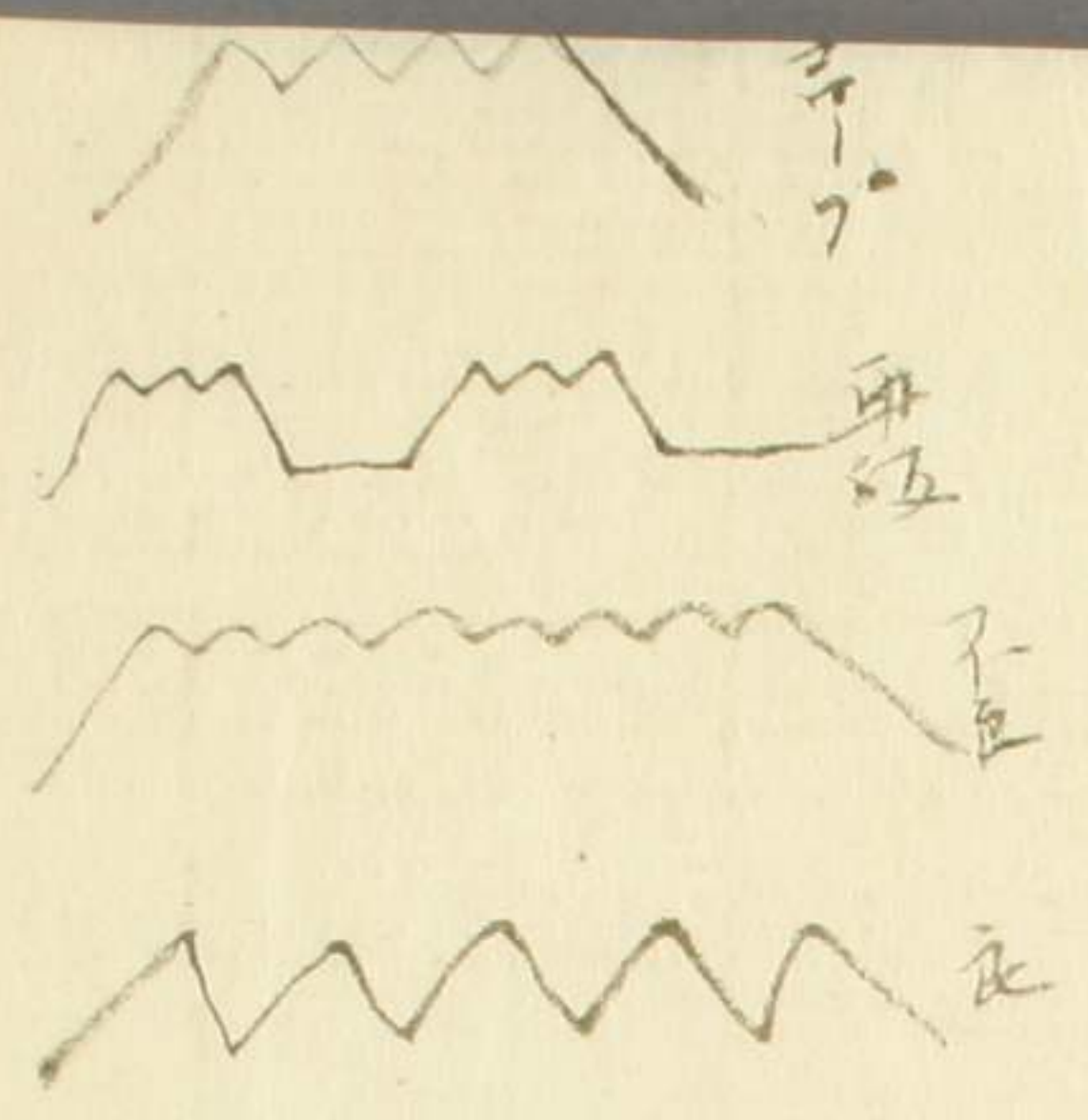
診新捷徑 卷之二 十六 岡氏藏版

言部推... 卷之一
スヘキ者ナリ又其時宜ニヨリ挿置時間ヲ短縮
セント欲スルキハ之ヲ行ワントスル前ニ於テ
先ツ此器ヲ熱湯中ニ挿シ摄氏四十一度ニ昇ラ
シメ而メ后凡ソ五分時間挿置スヘシ然ルニ
ヨル者ハ其挿置間昇降ノ極度ニ至ルヲ認定シ
〔乙〕ニ從フ者ハ其下降スルノ極ニ至ルヲ俟テ而
メ後除去スヘシ
驗温ハ現存スル熱勢ノ多寡ヲ知ルニ於テ最モ
確實ナル定型ナリ故ニ之ヲ詳悉セント欲スレ
ハ宜ク驗温器ヲ用フヘシ此器ハ諸般ノ病的ニ

於テ一晝夜間ノ熱度昇降ノ差異ヲ詳ニ測定ス
ルニ貴要ナル者ニメ特ニ鑿識及預后ニ於テ其
關係亦大ナリトス故ニ之ヲ施スニハ少ナクモ
朝夕二回ニ下ルヘカラス而メ其檢シ得ル所ノ
温度ヲ比較表ニ記シ兼テ一分時間ニ算定スル
所ノ脈搏及呼吸ノ数トヲ併セテ記載スルヲ要
ス六十六章ヲ
照考セヨ
若シ熱温摂氏ノ四十二度ニ昇リ或ハ降リテ三
十五度以下ニ至ルキハ即チ共ニ病ノ危篤ニ迫
ル兆トス注意セシムハアラス

〇十七
明成

歴驗ニヨレハ初メ寒戦ヲ以テ起ル所ノ病ハ其熱最モ高度ニ至ルヘシ即チ間歇熱、心内膜炎、瘧熱、静脈炎、膿毒病、腦脊髓厚膜炎等ニシテ其他之ニ属スル者ハ急性室伏私、發疹病ナリ間、肺炎、肋膜炎等ノ諸症モ亦此ノ如キナリ
温度ノ下降スル者ハ通常稀ニ見ル所ニシテ縱令之アルモ多クハ僅々ナリ例之ハ強劇ノ蒼青^{チライセ}症ヲ發スル心臟病、蜜尿病ノ如シ但シ從來目撃シ得ル所ハ虎烈刺ニ於ケル寒冷期^{スタジウム、アルカドム}ヲ以テ其寂モ甚タレキ者トス此症ニ於テハ其温度



摂氏ノ三十二度五分ニ下降スル者アリ
病ノ初起ニ在テハ病機發動ノ方向ニ從テ体温速ニ高昇シ或ハ漸次ニ増進スル者アリ即チ(一)ハ病機發動ノ時ヨリ高熱ヲ顯ハメ長ク持續シ或ハ全經過中稽留スル者アリ(二)ハ病ノ經過中ニ在テ熱度ノ昇降互ニ相交換シテ發スル者ナリ但シ一定ノ劇熱^{摂氏四十一度}ニテ纏延持スル者ハ预后甚タ不良ノ兆トス然レ其弛張アリテ殊ニ早且温度ノ下降スル者ハ预后ニ佳良ヲ與フル者トス

総テ劇熱ヲ有スル患者ハ其死ニ瀕スルニ當テ
 温度ノ愈亢昇スルヲ目撃スヘシ然レテ病ノ
 初期ニ於テ死ニ陥ルキハ温度亢進頗ル強劇ナ
 リ且ツ其温ノ死後ニ至ルモ猶暫ク存在スル
 アリ
 又体温漸次ニ下降シ或ハ卒然减退シテ死ヲ將
 來スル者アリ縦令ハ出血ニ由テ死スル者其他
 結核病及著シキ蒼靑症ヲ發スル心臟病ニシテ
 此等ノ症ニ於テ死亡スル者ハ其死ニ瀕スルノ
 時体温已ニ常度以下ニ降ル者ナリ

六

脈搏之ヲ切スルニハ醫士右手或ハ左手ノ示指
 中指及無名指ヲ共ニ少シク前ニ屈シ患者ノ手
 關節上部ニ於テ腕骨動脈ヲ按スルノ數分時間
 ニ至ルヘシ然ルキハ其搏數ノ増多スルカ一
 搏動ノ數常ヨリ減少スルカ通常ヨリ搏數或ハ
 多キヲ云フ指頭ニ触レ去ル少キヲ云フ搏數或ハ
 疾速ナルカ甚タ速ナルヲ云フ緩慢ナルカ指頭
 スルヲ云フ強ナルカ弱ナルカ脈搏ノ顯著ナル
 長キヲ云フ強ナルカ弱ナルカ脈搏ノ顯著ナル
 ヨル者ニメ即チ搏齊整ナルカ不正ナルカ或ハ
 カノ強弱ヲ云フ搏以上結代錯雜アルカ通常搏數
 結代アルカ一搏ヲ云フ錯雜アルカ通常搏數
 間錯スル者ヲ云フ或ハ大ナルカ小ナルカ搏夕

絲細ナルカ又ハ重複スルカ或ハ全ク缺乏スル
カヲ能ク察知スルコトヲ得ヘシ且其之ヲ診スル
ノ際ハ可及的注意シテ脈管ヲ強壓スルコト勿レ
若シ患者脂肪過多ナルカ或ハ骨傷脱臼等アリ
テ審ニ之ヲ候フコト能フサルキハ更ニ他部ノ動
脈即チ頸動脈、頸動脈上ニ於テスヘシ其他脈
ヲ切スルニハ左右ノ搏動ヲ互ニ相比較シ且ツ
心動ト一致セルヤ否ヤヲ檢セスハアラス其
之ヲ檢スルニハ一手ノ三指頭ヲ動脈上ニ安置
シ他ノ一手掌ヲ左胸第五肋間ニ平貼シ茲ニ於

テ心臟搏動ノ数ト其力ノ強弱及ヒ觸面ノ廣狹
トヲ知リ^{特ニ呼吸ノ終}且ツ橈骨動脈ト比較シ
テ其關係如何ヲ了知スルニ至ルヘシ又患者ノ
仰臥スル片ハ心動ヲ按スルモ若シ微弱ニシテ應
マサル片ハ更ニ起坐ヲ命シ且躰ヲ少ク前ニ屈
セシメ而後檢スヘシ又仰臥スル片ニ在テモ聽
胸器ヲ用ユレハ明ニ之ヲ知ルコトヲ得ヘシ但シ
脈狀ヲ精細ニ檢スルニハ亦能ク此ニ的應スル
所ノ器械アリハ^{ハリス氏ノ脈壓計}及^{ハリス氏ノ}
ヤオルト氏ノ脈波計^{スモグモ}是ナリ只惜クハ其等

ノ器械ヲ用ユルハ特病院ノミニメ彼往診鑿流
 一於テハ之ヲ施用スル甚便ナラサルニ由テ姑
 ク之ヲ指頭ニ委シテ檢索スルヲアルノミ
 卒倒窒息劇甚ノ搖擗及瀕死ノ者ニ於テハ撓骨
 動脈上ニハ脈搏ヲ觸知スル能ハサルヲ屢之ヲ
 リ然ハ心臟ニ近キ動脈上ニハ猶未タ全ク絶ヒ
 サル者トス
 脈搏ノ遲速ハ左ノ原ニ由テ自ラ差異ヲ生スル
 者トス即チ年齡男女身軀ノ大小體質時期飲食
 運動大氣ノ溫度精神作用及藥品等是ナリ其他

言謝抄
 卷之二
 同出補抄

感覺過敏ノ人ニ於テハ鑿士ニ親接スル時ニ當
 テ多少感動セラレ脈搏増加スル者アリ故ニ患
 者ニ値テ直ニ脈ヲ按セス其神思鎮靜スルヲ
 候ヒ而後之ヲ診スルヲ佳トス
 年齡ニ由テ脈搏ニ増減アルハ日常記臆セス
 ハアラス宜ク左ノ表ヲ熟觀シテ之ヲ銘心スヘ
 レ

年齢	一分時 間ノ搏 數
胎兒初竟滿月	自百二十 至百五十
一年	自百二十 至百二十
二年	自百二十 至百九十
三年	自八十 至百
七年	自七十二 至九十
十二年	七十
懷春期	自八十 至八十五
壯年	自七十 至七十五
老年	自六十 至六十五

新書
 卷之二
 〇二十一
 同出補抄

静脈搏動 静脈ハ健射上ニ於テ決シテ搏動ヲ顯
ハスヘキ者ニアラス其發スルヤ左ノ二種アリ
〔甲〕ハ動脈搏動ノ餘勢ヲ感受シテ假ニ搏動ヲ顯
ハス者〔乙〕ハ静脈自己ニ搏動スル者アリ而シテ其
乙ニ属スル者ハ特リ頸静脈ニ於テノミ見ル所
ニシテ心臟右室ノ疾患ヨリ頸静脈瓣ノ合閉不
全ヲ誘發スルニ基ク者トス但シ其搏動ハ唯目
能ク視ルヘキ者ニメ指之ヲ按スルモ其感覺ア
ルヲ稀ナリ
血行系ノ障害ヨリ頸静脈大ニ充張スルハ彼

三

ノ静脈搏動著ク顯ハル然ルハ二様ノ搏動ヲ
見ルヘシ即チ〔一〕ハ呼吸運動ト一致シテ呼吸ノ
時ニハ膨脹レ吸氣ノ時ハ沈縮ス〔二〕ハ心臟収縮
ト互ニ應シテ一種振蕩性ノ運動ヲナス者アリ
故ニ頸静脈ノ著ク擴張スルハ常ニ血行系ニ
大ナル障碍アルヲ徵スル者ニメ彼三尖瓣ノ合
閉不全ニ於テ之ヲ見ル
觸診ハ以上述ル所ノ他蓄液ノ波動ヲ試ムルニ
須要ナル者ニメ其主的ハ軟性ノ壁ヲ以テ圍擁
セラル、所ノ蓄液ヲ壓シテ人工波動ヲ起サ

新書
卷之二
〇二十二
周
版

レムルニアリ之ヲ行フニハ其蓄液アルカヲ疑
 フク部ニ一手ヲ措キ更ニ他ノ一手ヲ以テ其對
 向部ヲ衝突シテ波動ヲ試ムヘシ若シ其部ヲ衝
 突シテ起ル所ノ波動彼部ニ連リ互ニ相應スレ
 ハ其停蓄アルヲ明徴ス 腹水ヲ檢スルニ
 專ラ此法ニ由ル

○測診 メンストラ
チラン

測診ハ視觸ニ覺ヲ兼テ諸器ヲステルチルケル
皮膚ノ知覺 ヲ檢スル兩脚器 セシチメト 入スヒロメートル
肺中ノ氣量 ヲ計ル器 ノ補助ニ賴テ以テ患部ノ大小及周
 圍ト直徑トヲ定メ或ハ左右兩箇アル者ニ就テ

六

七

ハ其大小比較對稱ヲ檢ス其他肺ノ容量等ヲ測
 定スルナリ

明治十年八月廿四日 版權免許
同十一年二月廿一日 出版

第四大區七小區
本郷森川町四十二番地
東京府平民
岡 玄卿
翻譯出版人

診斷捷徑卷之一終 弘前 岡野因策校

元

診斷捷徑卷之二

獨乙

日本

岡

玄卿

著

譯

○簡約理學的診斷法

簡約理學的診斷法トハ打診聽診ノ二法ヲ謂フ
ナリ此二法ハ病ヲ診スルニ方ヲ孰ラ先ニマ
ラ後ニスベキカ小兒ニ於テハ先ヅ聽診シ次ニ
打診ヲ施スヲ可トス何トナレハ小兒ハ多ク診
察ノ長キニ耐ヘズ動スレバ啼聲ヲ發スルヲ以
テ聽診ニ應スル微細ノ音響ハ為ニ攪破セラレ

診斷捷徑

卷之二

一

岡

玄卿

校

言出... 卷之二

無益ノ勞ヲ費スノミ打診ノ如キハ之ヲ異ニメ
啼聲嘔々ノ際ト雖モ猶能ク辨知スベキ所アレ
ハナリ

○打診 ベルクッ
レラン

打診ハ體ノ表面ヲ打敲レ之ニ由テ起ル音響ノ
性ニ從テ其部内ニアル器官ノ景状ヲ鑒定スル
ナリ

都テ打診ハ體中諸部ニ就テ空氣ヲ十分或ハ幾
分カ蓄藏スルカ若クハ之ヲ蓄藏スルモノト看
做スベキ部或ハ多少空氣ヲ含有スル内器ニ於

三

テ施スベキ者ニメ胸腔、腹腔、内臟脱、ハレ皮膚氣腫
等是ナリ故ニ打診ヲ病軀ニ用ユルノ主的ハ常
ニ健全體ト比較照考レテ内器ノ境域或ハ一部
ニ含蓄スル空氣ノ多少及緊張ノ度ト周壁ノ状
ヲ察シ兼テ之ト隣接シ空氣ヲ含蓄セザル内器
ノ位置ヲモ判定スルニアリ
打診ヲ施スニハ右手ノ中指ヲ少ク前ニ屈シ軀
面ニ向テ打敲スベシ但シ其之ヲ試ムルノ間肘
關節ヲ運動スルヲナク只腕關節ノミヲ使用ス
ベシ是此法ヲ施スニ於テ極メテ重要ノ件トス

診... 卷之二

以上述ルガ如ク直ニ肌表ヲ打敲スルヲ直達打診法ト曰フ然レ一部ヲ精密ニ打診セント欲セハ左手ノ一指或ハ二指ヲ軀面ニ密接シテ其指背ヲ打試スベシ輓令ハ指ヲ用ユルトナク別ニ打診板アリ其板ハ象牙或ハ金属或ハ硝子ヲ以テ製シタル圓形又ハ長形ニメ其幅四センチメートル高半センチメートルノ縁ヲ有スル者ナリ又打槌ヲ用ユルアリ總テ之ヲ介達打診法ト曰フ其他劃線打診法ナル者アリ是通常打診板ノ板面ヲ軀ニ平貼スル如クナラズ只其邊縁ヲ

三

貼メ其上ヲ打試スルナリ此法ニ由レバ精密ニ内臓器ノ境界ヲ定メ或ハ狹隘ナル部分階四七肋間等ヲ検査スルヲ得ベシ
 打診音ハ打敲ニ由リ起リタル體壁ノ激動ヲ其内器中ノ空氣ニ傳ヘ共ニ顫動セシムルニ由ル者ニレテ其空氣ノ顫動スルヤ宛モレツナンツホトデン應響器ノ作用ニ均シキ者タリ是ヲ以テ其顫動ヲナスベキ空腔ノ廣狹ト其周壁ノ厚薄ト緊張ノ度ニ關シテ聲響自カラ同一ナラス故ニ耳官ニ感スル所ノ音調モ亦以テ差異アル

三

ヲ知ルベシ
 打診ヲ施スニ當テ若シ其部ニ絶テ空氣ヲ含マ
 サルカ或ハ之ヲ含ムモ其周壁甚ダ厚硬ニ過ク
 ル片ハ所謂實腹音ヲ發ス之ヲ鼓音腹ヲ打テ生
ル音ニ均
 シキヲト名ク又之ニ及メ空氣ヲ含蓄スル諸腔
 ニ於テハ其各部ノ性状ニ從テ諸種ノ聲響ヲ發
 ス之ヲ分テ鼓音滿音清音濁音トス
 鼓音テキム
ハニセハ外壁ノ弛緩性ヲ有セル腔内ノ空氣
 ヨリ起ル者ニメ其顫動周壁ニ支障セラレ、
 ナキガ故ニ其音稍平等ナリ是ヲ以テ其調樂音

ニ近シ蓋空氣ヲ含有セル腹内諸臟ニ於テ發ス
 ル所ニ又特ニ胃ノ如キ大腔内ニ起ル者ハ其音
 低ク腸ノ如キ小腔内ニ在リテハ其調高キヲ常
 トス
 滿音ホルハ緊張セル腔壁ノ内ニ充盈シタル空氣
 ノ顫動ニ由リテ起リ其顫動周壁ニ支障セラレ
 テ固有ノ音ヲ發スルヲ得ス故ニ樂音ノ如キ
 正調ヲ聽カズ健強ナル人ノ右胸壁ニ起ル打診
 音ノ如キ即チ其一例ナリ
 滿音ハ鼓音ニ於ケルガ如ク其内腔淺キハ短

診部抄
 卷之二
 四
 四

ク且高キ音調ヲ發シ若シ其周壁薄キ片ハ清音
ヲ發シ小兒胸部ニハ清ニシテ充盈ナル音ヲ發ス甚ダ厚キニ過ク
ル片ハ更ニ濁調ヲ呈ス大人ノ肩胛部ニ於ケル音ノ如シ
又鼓音ト濁音ノ間ニシテ鼓ニメ清ヲ帶ル音ト
鼓ニノ濁ヲ兼ナル音トノ區別アリ其他清ニシ
テ濁音及濁ニメ濁音ト唱フルアレハ通常之
ヲ概メ濁音ト濁音トニ區別セリ
空洞音フニフハ鼓音ノ一種變調セル者ニシテ壘
形ノ空洞内ニアル空氣ノ顫動ヨリ起ル音
響ナリ人エヲ以テ此音ヲ模擬セント欲スルニ

ハ其腹ノ膨大シテ巨口ヲ具フル玻璃壘ヲ取り
輕々之ヲ打撃シテ試ムル片ハ之ト均キ音ヲ發
スベシ
鑛性音メタリハ空洞音ノ調高クシテ金屬ヲ打ツ
時ニ起ル者ノ如シ
破壺音ビニイノ氏ノ稱ハ罅隙アル壘ヲ擊テ生スル
音ニ類スルヲ以テ名ヅクル者ニメ此音ノ起ル
ハ蓋打敲ニヨリテ壓搾セラル、空氣ノ速ニ其
罅隙ヨリ迸出スルニ由ル
凡ソ打敲ヲ行フニ其力甚ダ強キ片ハ其檢索ヲ

言部 卷之二 五

第五濁性鼓音ハ胃ヲ被フ肝ノ左葉部ニアリ
病體上打診

肺臟ニ於テ鼓音ノ生ズルハ肺胞壁ノ弛緩スル
カ肋膜腔ニ空氣ノ侵入スルカ或ハ表面ニ近キ
肺組織ニ生ズル空洞ニ由ル者タリ
空洞音、鑛性音、破壺音ハ皆表位ニ近接セル肺質
ニ空洞ヲ生ズルニ由ル
濁音或ハ實質音ノ肺面ニ显ワル、ハ肺質ノ硬
化シテ空氣ヲ含マザルカ或ハ肋膜腔内ニ滲出
物アルカ或ハ肋膜炎ニ由テ胸膜ノ化厚スルカ

或ハ心臓及肝臓ノ増大スルカ轉位スルカ將々
心嚢擴張ニヨルカヲ鑿識スベシ
腹内臓部ノ濁音或ハ實質音ハ腸管内ニ含有物
ノ鬱蓄アリテ空氣ヲ送出スルニ由ルカ或ハ肝
脾心、膀胱、子宮、卵巣ノ轉位及増大ニ由ルカ或ハ
腹腔内ニ滲出物ノ滞留スルカ或ハ腸管内ニ成
形物ノ新生スル等ニ由ル者ナリ
其他甚稀ニ脱腸及皮膚氣腫ニ鼓音ヲ表ハス
テリ

三

○聽診 アウスクル
タチラン

聽診ハ診斷法ノ一ニシテ聽官ヲ使用シテ正音ト雜音トヲ審定スル者ナリ而メ其正雜二音ハ空氣ノ出入ヲ主トル呼吸諸器ト血液循環ヲ營

亮

ハ心藏及血管中ニ起ル者トス聽診ヲ行フニハ其檢スベキ軀ノ表面ヘ直ニ耳

罕

ヲ貼シ或ハ聽筒器ステトス
コーブヲ用ユルヲアリ通常用ユル所ノ聽筒器ハ第一製レンネツク氏ノ發明ニ係ル者ニメ木材或ハ硬性ノゴムヲ以テ製シタル管ナリ而メ其下端ハ少ク擴張シテ

花蓋狀ヲナシ其上端ハ大ニメ廣ク能ク耳ヲ接スルニ適合セリ第二製ハニトマニトマ氏ノ稱用セル器ニシテ聽水アクトキ
レロント稱セル者ニメ上下ニ通スル孔ナク中實セリ其形狀ハ前器ト異ナルトナレト雖只其下端ハ半球形ヲナレト終レリ第三製ハゴエニヒ氏ノ用ユル所ニシテ彈力ゴムヲ以テ製セル二葉ノ膜ニ因テ緊張セル空室アリ更ニ之ニ彈力ゴム管ヲ連ネ其上端ハ即チ術者ノ耳中ニ挿入スベシ之ヲ用ユルニハ空室ヲ軀面ニ貼シ發音ヲシテ先ヅ其膜内ニ顫動

言
卷之二

四

セシメ再ヒ
管ヲ通メ耳官ニ達セシムルナ
リ
聴笛器ヲ用ユルノ主意ハ一ニハ診候ノ間ニ於
テ其聴カント欲スル部ト之ヲ聴クベキ耳官ヲ
メ使用ヲ得セシムルニアリ宜ク第三製ノ器ヲ
用テルヲ最モ良トスニハ聴カント欲スル音
ノ所在ヲ檢索スルニ常ニ十全確明ナラシムル
者ナリ
聴笛器ヲ用テルニハ其下端ヲ全ク體面ニ密貼
シ他ノ一端ニ耳ヲ附捺シテ管孔ト聴道ト直線

ニ正對セシムベシ尚其位置ヲ正フセント欲セ
バ三指頭ヲ笛ノ下端ヨリ稍上部ニ接シテ保持
スベシ此ニ注意スベキハ衣服ヲシテ聴笛ニ抵
觸セシメザルニアリ是其摩擦ニヨリテ更ニ復
雜音ヲ生シ吾カ診斷ヲ妨クルヲ以テナリ其他
聴笛器ヲ體面ニ強壓スルヲ勿レ若シ強壓スル
キハ患者其痛ニ堪ハス且ツ呼吸ヲメ稍困難ナ
ラシムルヲアリ
聴診ニ由テ得ル所ノ者ハ即チ呼吸音及ヒ心臓
正音ト脈管正音ト心及脈管ノ雜音ナリ

今
九

三

健體上生理的呼吸音

第一 氣管呼吸音 タラヘアル
フットメン ハ頸部ニ於テ氣管ノ上ニ對シ呼吸及吸氣時ニ發スル者ニメ今聽笛器ノ如キ管ヲ中等ノカニテ吹クハ此音ニ擬スルヲ得ベシ

第二 生理的氣管支呼吸音 ヒイレヲロキエロン
ヒアキアットメン ハ氣管音ニ類メ其調稍高ク肺根ニ於テ呼吸兩間ニ發スル所ノ音ナリ故ニ之ヲ聽クニハ脊椎ニ沿テ第二肋骨ヨリ第四肋骨ノ間ニ於テスベシ殊ニ右部ニ於テ分明ナリ

第三 氣胞音

ウニレクレ
ヒアットメン ハ輕ク氣ヲ噓フカ如キ音ニレテ吸氣ノ際健強ノ人ハ全肺ニ之ヲ聽クヲ得ベシ之ヲ人工ニ擬スルニハ口ヲ僅ニ開キテ空氣ヲ噓フテ此音ヲ得ルナリ

第四 小兒呼吸音

ブエリーレ
フットメン ハ前音ニ比スレハ少ク銳ニレテ常ニ小兒ノ胸上ニ於テ吸氣時ニ著ク聽ク所ノ音ナリ

病的呼吸音ハ呼吸作用障碍ト氣道ノ妨碍ト聲音ヲ導達スル躰ノ異常トニ由テ起ル者ナリ之ヲ約言スレハ肺組織或ハ氣管支或ハ肺ノ周壁

四

四

及諸器ニ起ル病的的作用ニ基ク者トス而メ此音ハ每呼吸時ニ見ワル、アリ又時トシテハ唯強劇ノ呼吸ニ由テノミ起ルモノアリ

病的呼吸音ヲ分テ左ノ六種トス

第一衰弱呼吸音 フコルレユウエヒ ハ未全ク肺胞音ノ性状ヲ失ハズシテ吸氣時ニ於テ之ヲ聽クコトヲ得ルモ其音甚ダ微弱ナルモノナリ是諸種ノ原因ニテ呼吸作用ノ不全ヲ致スニ由テ生ス又稀ニ此呼吸音漸次ニ減少シテ全ク聽クベカラザルニ至ルコトアリ或ハ多少之ヲ存スルモ他ノ雜音

ノ為ニ掩蔽セラレテ診定シ難キモノアリ

第二斷續呼吸音 サツカレール ハ一頓ニ吸氣ヲナス能ハズメ斷續スル者ヲ謂フ是肺ノ擴張作用不全ナルカ或ハ氣管ノ閉張スルコト甚遅慢ナルニ由ル

第三延長呼吸音 フェルレンゲルテ ヲ發スルハ肺組織固有ノ弾力ヲ失ヒ収縮性ノ不全ナルニ由ル而メ其収縮不全ヲ來スハ肺ノ一部浸滲蒸蕪シテ肺質ノ凝固スルニ原ツク者ナリ

第四銳利呼吸音 フェルセルラ ハ小兒呼吸音ト頗ル相

類似スレ氏之比スレハ極メテ過鋭ナル異常音ニメ肺中尚官能ヲ有スル部ニ於テ之ヲ聴取スヘシ

第五 氣管支音

ブロンヒア
レイトン

ハ健肺ニ見ハル、者ト殆

ント同性ナレ氏其聲響自ラ淺ク且鋭ニメ處々ニ散發スル者ナリ此音尚甚シキ者ヲ「ヨシソ」ニ「レン」デ併呼吸音ト謂フ夫健肺ノ氣管支ハ空氣ヲ充盈セル肺胞組織ヲ以テ攢簇固擁セラル者ナレハ常ニ聲響ノ導子トナリ其顫動ヲ他ニ傳フル少ナシト雖氏若肺胞内ニ空氣ヲ流通

スル「ナク」肺質凝固シ變シテ一種充實ヒル者トナル氏ハ他ノ固形軀ノ如ク能ク聲音ヲ導テ共ニ顫動スル者ナリ故ニ氣管支音ハ肺組織ノ此ノ如キ變化ヲ受クルニ當テ確乎タル聴徴トナスベシ又此音ヲ發スルニ其氣管支内ニ必バ空氣ノ流通ヲ要ス故ニ若シ此ニ充塞或ハ壓迫ヲ來タス者アルハ復々其音ヲ聽ク「ナシ」肺胞中ニ空氣ノ缺乏ヲ將來スルノ原ハ即チ

- 一ハ肺質ノ凝固 肺炎及結核ノ浸滲
- 二ハ肺質ノ凝縮 肺炎及結核ノ浸滲
- 三ハ肺質ノ凝縮 肺炎及結核ノ浸滲

諸病類 卷之二 呼吸器

第六 空洞呼吸音 アンフラリセ、アトマン ハ氣管支音ノ一種變性

シタル者ニメ其發生スルモ亦氣管支音ト其因
理ヲ同フスト雖モ只其壘狀ヲナセル空洞内カエ
ニ空氣ノ流入スルカ為ニ生スルノ差異アリ
若シ一管ヲ取り其端口ヲ横ニ吹クキハ人工ヲ
以テ此音ヲ發スルヲ得ベシ
氣道内ニ流動諸液 粘液、膿汁、血液及初生兒ニ於テ吸入セル卵液等ヲ
儲ヘ若シ其液稀薄ナレハ吸氣ニ隨テ竄入スル
空氣ト混メ大小ノ泡沫ヲ生シ氣管支ノ内面ニ
粘着シ或ハ全ク其局部ヲ閉塞スルヲアリ又同

罌

罌

處ニ粘調ニメ且泡沫ヲ生セサル分泌物ヲ存ス
ルアリ而メ呼吸毎ニ進入セル空氣該部ヲ通過
センカ為ニ其液ヲ彼此ノ所ニ動揺レ或ハ穿孔
レ又泡沫ノ若干顆ヲ破裂セシムルヲアリ之ニ
由テ數種ノ雜音ヲ生ス之ヲ總稱メ囉音ラツト曰
フ
囉音ヲ別テ乾性濕性ノ二トス此音樂上ノ原理
ニ就テ氣道中ニ存スル含有物ノ濃淡厚薄ヲ確
定スル所ナリ

甲 乾性囉音ヲ區別メ左ノ三種トス

第一種 クナルレン 是最乾性ニ、空氣ヲ含
マサル粘稠液ノ氣管支壁ニ固着シ空氣ノ通
過ニ當テ辨ノ如ク、~~變~~慢ナル顫動ヲナスニ由
テ生スルモノナリ

第二種 ハ第一種ト第三種ノ間ニ位スル者ニ
メ吹笛羅音^{フアイ}ヘシイ 及類軒羅音^{レニユ}レニユ 是ナリ此二
音ハ共ニ空氣ヲ混セサル稍稠厚ナル液ノ外
ヨリ流入セル空氣ニ由テ忽チ排斥レ或ハ衝
開セラル、カ為ニ生スル顫動ニ由ル者タリ
第三種 肺胞羅音^{チユルレン}ニメ此音ヲ或ハ誤稱

メ捻髮羅音^{クニスラル}トナス者アリ蓋此音ハ肺
胞壁若クハ毛細氣管支壁ノ粘稠ナル液ヲ以
テ互ニ膠着スル所ヲ空氣ノ通過ニ當テ忽チ
排開セラル、ニ由ル^{肺炎ノ初期及末期者ナ}リ

又一ニ此音ヲ快復爆鳴ト名ク是肺炎ノ終期
ニ多ク顕ハル、ヲ以テナリ
乙 濕性羅音ハ凡テ破泡音ニメ之ヲ分テ大中小
ノ三トス

水泡ノ破裂ニ由テ起リタル音ノ高低ハ其泡ノ

大小ニ准ス泡ノ大小ハ之ヲ生スル部位ノ廣狹ニ應スル者ナリ故ニ其音調ノ低キ者ヲ大水泡音ト謂ヒ大ナル氣管支内ニ起リ之ニ反シテ其調高キ者ヲ小水泡音ト名ク細氣管支ニ起ル者是ナリ又中水泡音ハ大小ノ中間ニメ其音モ亦中等ニ屬ス

捻髮囉音 クニステル
ラッセル ハ小水泡音中最モ微細ナル音ヲ謂フ不定水泡音ハ以上諸種ノ囉音ヲ聚合スル者ナリ

其他區別スヘキ者ハ第二氣管囉音 クラヘアル
ラッセル ハ他

ノ囉音ニ比スレハ其調大ニ且低ク其部ヲ遠隔スルモ尚聽クヲ得レ俗間之ヲ稱シテ喊沸或ハ胸煮ト謂フ是氣管内ニ過多ノ分泌物ヲ蓄積スルモ咳嗽ニ從テ之ヲ咯出スルヲ能ハガハキニ生スル者ニメ病的ニ於テ甚々凶險ノ徵ナリ而メ之ヲ軒聲ト誤認スルヲ勿レ軒聲ハ軟口蓋ノ麻痺ニ由リ懸雍垂ノ振顫シテ起ル者ナリ

第二氣管枝囉音 アロシヒアル
ラッセル ハ氣管枝音ト同理ヲ以テ起ル者ニメ通常ノ囉音ト異ナル緣由ハ其一

言出持... 卷之二

種ノ應響明瞭ナルニアリ

第三併響囉音 コンソニール ハ氣管支囉音ノ頗ル著明

ナル者ナリ故ニ屢氣管支囉音ト混同スルヲア

リ

第四空洞囉音 アンフアリゼ 即チ空洞呼吸音ト同等ノ

景况ニヨリテ起ル者ニメ其音ノ性状モ亦之ト

異ナルヲナシ

第五鑛性囉音 メタリセ ハ空洞性ヨリ稍其調ノ高キ

者ニメ金屬ヲ撃テ起ル音響ニ均シ

第六鑛響囉音 メタリセクリン ハ空洞中ニ於テ各箇ノ

四

水泡破裂スルニ由テ起ル所ノ者ニメ之ヲ人工

ニ生スルハ硝子壘ニ水ヲ過半盛り再ビ其上ヨ

リ水ヲ点滴スルハ之ニ均シキ音ヲ得ベシ

然テ空洞内ニ起ル所ノ音即チ空洞呼吸音、空洞

囉音、鑛性囉音、鑛響囉音ハ槩稱シテ空洞雜音ト

謂フ

空洞ハ肺質中ニ生レタル壘状ノ空隙ナリ而メ

其空洞ヲ生スルニ二因アリ一ハ氣管支ノ擴張

スルニ由リ二ハ肺質ノ膿潰溶崩スルニ由ル

健體ノ胸上ニ聽笛器ヲ貼レ其人ヲメ高聲ニ談

今新書

卷之二

同

言語抄 卷之二

話セシメ或ハ数字ヲ高唱セシムルハ其聲音
不明ニテ恰モ蜂聲ノ如シ令病等肺炎アリテ肺頂
緻密或ハ壓縮セラル、者ニ在テハ氣管支音ノ
生スルト同理ニメ能ク聲響ヲ導達スベキ頂タ
ルヲ以テ其言語大ニ明亮ニメ近接メ之ヲ聽ク
カ如シ此發現ヲ名テ胸語フロンホト曰フ又時トメ
ハ此音ニ吼ユルカ如ク且振顫スルカ如キ音響
ヲ誘發スルトアリ之ヲ名テ山羊聲エツホト曰フ
若シ肺頂直ニ胸隔ニ接着セズメ其間粗糙ニメ
弾力ナキ組織肋膜炎等ヲ拵入スルハ其音自

哭

ラ障碍スルカ故ニ絶テ胸語ヲ聽クコトナレ肋膜炎ニ
於ケル又肺頂凝固或ハ壓搾或ハ胸壁化厚スル
カ如シハ幽遠ナル胸語ヲ聽クベシ
聲顫動スタンムフハ大聲ヲ以テ言語スルニ當テ胸
壁ノ顫動レテ生スル者ナリ之ヲ聽カント欲セ
ハ胸部ニ耳ヲ貼スルカ若クハ手ヲ接スヘシ其
生スルハ胸語ト其理ヲ同フス而シテ其感觸ニ強
盛ナルト微弱ナルト缺乏スルノ三件アリ
小笛音フラゲラレツハ間、肺ノ穿孔ニ由テ肋膜腔ト交
通スル者ニ起ル即チ吸氣ノ際肺中ノ空氣肋膜

兇

今新集 卷之二 〇十七 同 載 反

五

腔ニ竈入スルニ當テ發スル者ニノ小笛ヲ吹ク
 カ如キ高調ノ音ナリ
 振盪音スラックスハ空洞内ニアル液ノ互ニ突衝メ波
 動ヲ生スルヨリ起ル者ニメ仮令ハ水ヲ半ハ容
 レタル玻璃壺ヲ振盪シテ生スル音ノ如シ
 又之ト同一ノ性状ヲ具ル者アリ即チ肺中ノ空
 氣肋膜腔ニ竈入スル片ハ空氣ハ上方ニアリテ
 液ハ其下方ニアルヲ常トス而メ此際ニ肺萎縮
 ヲ來ス者ナリ如此片ハ患者ノ位置ヲ轉換スル
 ニ當テ振盪音ヲ發ス又敢テ胸面ニ直接レ聽診

五

セサルモ偶之ヲ明聽スルヲアリ
 心臟及脈管上ノ聽診音ヲ左ノ二種トス
 第一正音トイハ整正ニ短ク顫動スルヲ以テ音
 樂ノ調ニ比スベキ者ナリ且此音ハ何レノ作
 用ヲ以テ起ルカ何レノ時期ニ於テ顯ハル、
 カ將夕何レノ部位ニ在テ發スルカノ因理ハ
 循環篇ニ於テ記載スベシ
 第二雜音ゲロイハ不正ナル顫動ヨリ生スル者
 ナリ血液ノ器内ヲ通過スルニ當テ内壁ノ粗
 糙或ハ外部ノ壓迫或ハ逆流反行スル等ニ由

テ液躰或ハ顫動シ或ハ漩回シテ之ヲ發スル者ナリ

健全音ハ心及脈管ノ常位部ニ聽ク所ノ正音ト妊婦ノ子宮部ニ於テ聽ク所ノ胎盤雜音是ナリ但シ小兒ニ在テハ心臟音ヲ背部ニ於テ聽クコト得ヘレ

頸動脈及鎖骨下動脈ハ健全躰ニ於テハ聽音器

ニ由リテ「ヤンブス」音律ノ名ノ調ヲ具フル二音第一

短クメ第二ヲ聽ク然ハ心臟ヲ遠隔セル大ナル

音ハ長シ即チ腹大動脈、或ハ膝關及肘關節ニ至ルノ

動脈股動脈、膊動脈

部位ニ於テ只其一音ヲ聽クベシ然ハ脈壁其顫動性ヲ失フ者ニ於テハ全ク之ヲ聽クコトナシ

又小動脈ハ常ニ聽診上ニ關スル發見ナキ者ナリ

病的音トハ正音ノ過度有力ナル者カ或ハ異常

ノ部ニ正音ノ顯ハル、カ常在部ニ之ヲ缺乏ス

ルカ若クハ正音ト雜音ノ併發スルカ正音全ク

消失シテ雜音ノ之ニ代ル者アルカ又常ニ正雜

ノ二音存セサル部更ニ雜音ノ生スル等ノ如キ

是ナリ

診法 卷之三 〇十九 同 藏 反

言語辨行 卷之二

吾

頸動脈及鎖骨下動脈ニ聽ク所ノ第二音ハ大動脈辨音ノ此ニ傳達シ來ル者ナリ故ニ若シ大動脈第二音缺乏スルヲアレバ復タ此兩脈管ニ於テモ其音ヲ聽クヲナカルベシ即チ大動脈辨合閉不全症ニ於ケルカ如シ
心臟第二音ノ強劇ナルカ或ハ其一音若クハ二音心臟定圍外ニアルカ或ハ胸圍外ノ大ナル動脈或ハ小動脈摸骨動脈、后脛動脈、顫動脈等ニ搏動音ヲ聽ク
トアレハ心臟左室ノ血液ヲ射出スル力ノ極メテ強劇ナルヲ知ルヘシ又之ト同シク肺動脈ノ

吾

第二音左ノ第二肋間上ニ於テハ大動脈ノ第二音ニ比スレハ強ク且銳調ヲ帶フルルハ心臟右室ノ血液ヲ射出スル力過劇ナルニ由ルトヲ証スヘシ又以上揭示スル所ノ論ニ從ハサル者アリ即チ左肺下葉ノ肺炎ニ罹ルルハ心臟音ヲ左胸右部ニ於テ聽クトアリ是肺質ノ炎症ニ罹リテ凝固スルヲ以テ能ク其音ヲ傳達スルトヲ得レハナリ
心臟瓣膜ノ不全或ハ諸口ノ狭窄ヲ發スルルハ正音ニ兼テ雜音ヲ呈ハス者ナリ或ハ正音全ク消亡シテ雜音ノ之ニ代ルトアリ又貧血病及熱

二十

言出持行 卷之二 岡氏精林

性諸病ニ於テハ著徴スベキ解剖上ノ變化ナク
ノ雜音ヲ頭ハストアリ之ヲ血液雜音或ハ偽性
雜音ト謂フ

異

動脈ノ雜音(一)ハ心臟ヨリ傳播シ來ル者ニメ心
臟ニモ亦之ヲ聽ク(二)ハ脈管實質ノ疾病ト脈管
ノ擴張及外部ノ壓迫石灰質ノ沈着動脈ニ由リ
癩腫瘍ノ壓迫等
或ハ聽筒器ヲ強壓スルカ為ニ發スルトアリ其
他痿黃病貧血病血水病急性痿麻質私及室扶私
等ニ頭ハル者アレ其因理未タ全ク究明シ
能ハザル所ナリ

要

靜脈ハ聽診上ニ必ス正音ヲ呈ハスヘキ者ニア
ラズ又雜音ハ異常ニ動脈ト交通セル靜脈ヲ除
クノ外ハ特頭靜脈ニ於テ頭ハルノミ此音ヲ
名テ松濤音ソウチウソウト曰フ若シ此音ヲ一回呈ハ
スルハ必ズ持續シ存スル者ニメ強キ吹性音ト
粗糙音ト互ニ交換シテ發スルヲ常トス又此音
ハ血液ニ異常ナク且肥滿セル者ニモ亦稀ニ發
スルトアレ其貧血病及痿黃病ニ於テハ屢頭ハ
ル者トス
血液ノ旋流ヨリメ起ル音ノ顫動ハ甚ク強クメ

診行建五 卷之三 〇二十二 岡氏精林

言語抄録 卷之二

六

之ヲ按壓スルモ容易ニ知リ得ヘシ動脈瘤ニテ
觸知スヘキ猫佞聲及僧帽辯ノ合閉不全病者ノ
左心部ニ於ケル如キ是ナリ
摩擦音ハ二枚ノ膜面粗糙トナル者互ニ相摩軋
スルニ由テ起ル所ニメ其強盛ナルニ從ヒ聽診
上ノ發現愈較著トナリ最モ甚シキニ至テハ觸
診ニテモ覺知スヘキニ至ル者ナリ

五

肋膜摩擦音 プロイリナ
ミライメン ハ呼吸ノ際滲出物ヲ被リタ
ル肋膜面ノ摩軋ヨリメ生スレ者ナリ若シ滲出
物甚ク稠厚ニノ肋膜ノ両面ヲメ癒着セシムル

四

片ハ復摩擦音ヲ聞クヲナレ加之滲出物流動性
ニメ其面粗糙ナラザルキハ亦同ク此音ヲ呈ハ
スナレ
心囊摩擦音 ベリカルリア
レライメン ハ肋膜摩擦音ト其發生ノ理
ヲ同フス而メ此音ヲ初ヨリ最モ著ク聽クヘキ
所ハ心ノ基礎部ニアリ殊ニ滲出物少ナキ片ハ
心ノ収縮ト同時ニ發シテ其持續短ズレニ稍長
キ者ナリ若シ滲出液ノ量中等ナレバ開張時ニ
モ亦之ヲ聽クヘシ又其液量甚ク過多ナルカ或
ハ兩葉全然癒着スル片ハ此音消滅シテ全ク之

診所建五 卷之二 二十二 胸腹

言出指在 卷之三 〇二十三 岡氏藏

ヲ聴取レ難シ

〇驗温及熱論

熱症トハ惡寒ニ次テ體温亢盛脈搏增多レテ消
食機ノ妨碍ヲ來レ又諸分泌物ノ不調ヲ起ス等
ノ現象ヲ一般ニ稱スル者ナリ
惡寒或ハ寒戰ヲ發スル後霎時ニメ身體温暖ノ
感覺ヲ生レ次テ多少發汗ス
消食機ノ妨碍トハ先ツ食思缺乏レテ胃部不安
ヲ覺ヘ隨テ嘔氣或ハ嘔吐ヲ催レ或ハ煩渴引飲
或ハ便秘或ハ下利ヲ發スル等是ナリ

六

熱病患者ノ尿ハ多クハ其量減少シテ帶黃赤色
乃至渾ニ赤色ヲ呈ハシ異重増加レテ且尿素ニ
富ム

熱性病ニ罹ル者ハ多ク榮養不全ヲ見ハス
心臟收縮ノ數増加レテ其搏動強盛トナリ亦屢
第一音ヲ消失メ却テ收縮性ノ雜音ヲ聽クコトアリ

三

脈上ニ顯ハル、諸種ノ變化ハ已ニ前章ニ詳記
スルヲ以テ今此ニ贅マヌ二十六章ヲ見ヨ
熱性諸症ニ於テハ脈搏常度ニ比スレハ增多シ

診新捷徑 卷之三 〇二十三 岡氏藏

言出指... 氏... 氏...

且脈搏ト温度ト互ニ關涉シテ常ニ増減アル者ナリ

体温ノ昇降ハ熱勢ノ増減ヲ示ス確標ニメ熱性病ニ於テ缺クベカラザルノ一証ナリ何トナレハ体温高昇セズメ熱性ノ増進スル者未タ嘗テ之アラザルヲ以テナリ

体温ヲ計ルニハ驗温器一タ度ヲ五分ヲ以テ腋下或ハ肛門或ハ腔中ニ挿入スヘシ

通常ハ毎朝七時ヨリ九時毎夕四時ヨリ六時ノ間ニ於テスベシ然レ其病症ニ因リ特別ノ制限

三

ヲ要スル者アリ而メ諸多ノ熱性病ニ於テハ體温早晨極メテ低ク日晡大ニ高進スルモノタリ

四

健體ノ温度ハ腋下ニ於テ攝氏三十六度二分ヨリ三十七度五分ニ至リ肛内及腔中ニ於テハ三十六度八分ヨリ三十八度ニ至ル

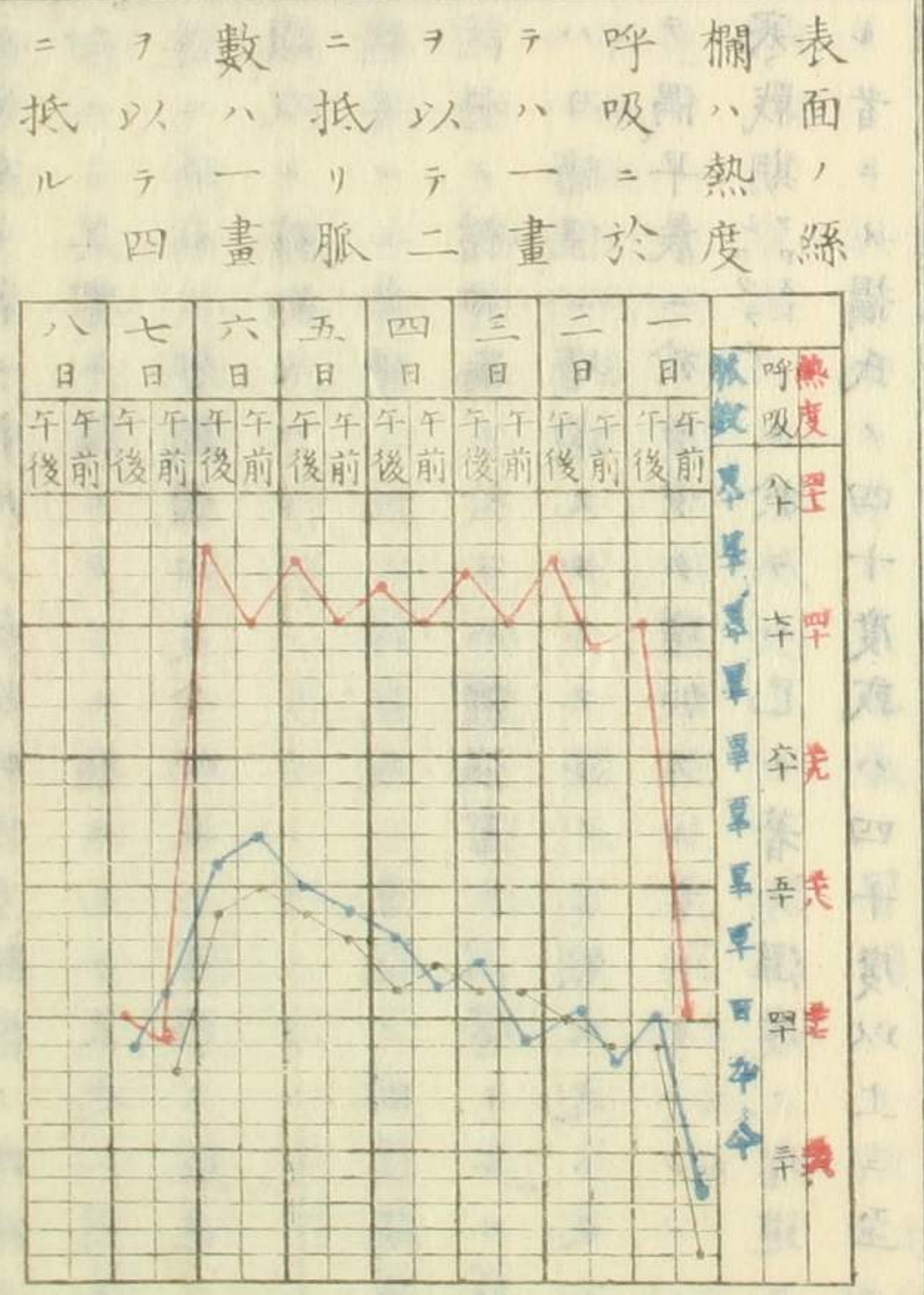
五

右ニ述ル所ノ温度ヲ超ヘテ増減スル者ハ假令ヒ其人自ラ健康ヲ覺ルモ必ス疾病タルヲ免レス然レ間躰温常度ニメ疾病アル者アリ故ニ一例ニ見ルベカラズ

診新... 二十四... 反

言出持包
卷之二
附以...

驗温器ヲ以テ一定ノ時ヲ刻シ屢及覆シ檢シ得
タル所ノ度ヲ毎回熱度表ニ記點シ又兼テ脈搏
及呼吸ノ數ヲモ記點シ而後其點ニ從テ色線ヲ
加ヘ數點ヲ連串スレハ則チ其度数ノ昇降ニ由
テ高低ヲナスヲ見ル之ヲ名テ熱度及脈搏ノ各
彎線ト曰フ宜ク左ノ圖表ヲ見テ其詳悉ヲ得ベ
シ
該表ハ譯者近日格羅布性肺炎患者ニ於テ實
驗スル所ニ係ル今之ヲ掲載シテ以テ其一例
ヲ示ス



今所建五
卷之二
〇二十五
附以...

言米抄卷之二
岡田氏藏

此彎線ニ就テ熱度ノ昇降呼吸及脈數ノ増減ヲ知ル^ル其掌ヲ指スヨリモ明ニレテ又之ニ因テ遂ニ其病ノ鑒識預后及合併症ノ有無ト經過ノ順次ヲ確知スベシ

空

輕易ナル急慢二性ノ諸症或ハ重症ノ回復期及諸種ノ精神病ニ於テハ體温常ニ同等ナルカ或ハ日晡僅ニ増進スル^ルアルノミ然^レ氏之ニ反シテ偶^ニ早晨ニ於テ少ク増加スル者アリ
寒戰期^{シユツテル}ニ於テハ已ニ著ク温度ノ増進スル者ニメ攝氏ノ四十度或ハ四十度以上ニ至ル

六

アリ此ノ如キ者ハ其外氣ニ冒觸スル所^手耳^頤等ノ肌熱ハ自ラ減退スル^レ體温必ス高度ニ達スル者ナリ然^レ氏所謂神經性惡寒^{毒物直ニ血中ニ入り知ルニ由テ起ル者ニ於テハ體温多クハ高昇スル}ヲナシ熱症患者ノ初期或ハ發熱ノ初ニ發スル惡寒ハ半時ヨリ二時ニ至ル者トス而メ其惡寒ニ期中ニ體温從テ増進シ惡寒ノ終リ或ハ惡寒ニ次ク所ノ發熱期ニ於テハ殆ト其極度ニ達スル者ナリ又其惡寒ヲ來スベキ原因全ク去ルノ後續テ温度ノ尤進スル者アリ

診新捷徑 卷之二 二十六 岡田氏藏

充

惡寒ヲ發スルヤ稀ニ大出血後ニ於ケルカ如ク
 體温ノ下降スルニ由ル者アリ名テ虚脱性ノ惡
 寒コルラッフス
フロイステト曰フ或ハ手足厥冷セスメ體温大ニ
 増進スル者ニ之ヲ發スルヲアリ膿毒病
如シ然氏間
 胸腹ハ温度増加シ四肢厥冷スルモ惡寒ヲ覺サ
 ル者アリ
 一田ノ寒戰ヲ發スルハ多ク肺炎腐敗熱急性發
 疹病痘瘡猩紅熱及發
疹性室扶私等發生ヲ証スル者ニ一
 定ノ時期ヲ以テ反復スル惡寒ハ間歇熱及回歸
 熱性ノ室扶私ナリ又之ニ反シテ不定ノ間歇ヲ

辛

ナス者ハ膿毒病タルヲ徵スベシ
 體温高進メ之カ為ニ患者感覺スル所ノ熱度ハ
 惡寒ニ伴フテ來ル者アリ或ハ惡寒ナクメ常温
 ヲリ直ニ發熱スルヲアリ而メ其熱勢ハ自ラ強
 弱多少アリ

七

虚脱コルラッ
ツグスハ病ノ經過中ニ見ハル、一種ノ變態
 ニメ體中一部特ニ四肢ノ温度ヲ減却スルヲ以
 テ徵スヘキ全身症ナリ大抵虚脱ハ霎時顯ハル
 、症ニメ其輕重自ラ一樣ナラス即チ内部ノ温
 度或ハ常ノ如ク或ハ増加シ或ハ減却スル等是

ナリ故ニ區別メ高度ノ體温ヲ有スル虚脱是劇性急
 慢ニ種ノ熱性病ニ發スル者ト低度ノ體温ヲ有
 二ノ屢死戰ヲ誘フテ死戰トナシ又急性
 スル虚脱ノ屢慢性病者ニ於テ死戰トナシ又急性
 熱病ノ解熱期ニ當リ體温一頓ニ減却シテ虚脱
 ヲ來スヲアリ或ハ甚タシキ弛張熱ヲ顯ス急慢
 二性ノ重症ニ於テ其熱ノ發作時限短ク且正整
 ニ反復スル者弛解期ニ向テ温度著ク下降シ遂
 ニ虚脱ニ陥ルヲアリ或ハ間歇性熱症其他外貌
 全ク健康ノ如キ病ニ於テモ卒然虚脱スルヲア
 リ然ル氏ハ即チ温度著ク低下シテ卒ニ死戰アゴ

ヲ發スルヲ常トス即チ
 體温或ハ常度ニ止リ或ハ常度以下ニ降リ或ハ
 常度以上ニ昇ルヲアリ其常度ニ止マル者ハ諸
 多人慢性病ニ於テ之ヲ見ル其以下ニ降ル者ハ
 解熱時死戰中又ハ大出血後及虚脱症ニ於テ多
 シトス而メ其自然ニ減退スルト虚脱ニ由リテ
 下降スルト自ラ殊別アリ自然ニ減退スル者ハ
 攝氏ノ三十五度ニ至ルヲ其極トスレバ腋下ニ
 者虚脱ニ由ル者ハ三十五度以下ニ降ルモノト
 ス温度ノ上昇スルハ許多ノ病ニ於テ最屢目

診新書 卷之三 二十八 綱 識 反

撃スル所ニメ其輕重ニ從テ細別スルノ左ノ如シ

〔甲〕高温トハ常温ノ僅ニ高キ者ニメ其未ク熱ト稱スルヲ得ザル者ヲ謂フ但シ温度ハ攝氏三十八度迄ナリ

〔乙〕亞輕熱ハ攝氏三十八度一分ヨリ三十八度五分ニ至ル

〔丙〕輕熱ハ三十八度六分ヨリ三十九度ニ至ル

〔丁〕真熱ハ三十九度一分ヨリ四十九度ニ至ル

〔戊〕高热ハ四十度ヲ超ユル者

〔己〕強熱ハ四十一度或ハ四十一度五分以上ニ至ル

驗温ニ由テ各病ノ明斷ヲ得ント欲スルニハ驗

三

四

温時限患者ノ脉質年齢ニ從テ斟酌セシムルヤカラズ何トナレバ小兒婦人及刺戟性ノ人モ之ニ屬ス如キハ大人ニ比スレバ體温常ニ高ク且變換シ易キヲ以テナリ

其他老人ニ於テハ同病ヲ患フル壯年ノ人ニ比スレハ體温常ニ半度乃至一度ヲ下降スルノ屢之アリ

健體ニ在テハ一晝夜間温度ノ差異甚著シカラスト雖モ病體ニ於テハ一日中屢變シ一度ヨリ一度半ニ至ル加之ナラズ時トメハ六度乃至八

度ノ大ナル差異ヲ呈スルアリ又日々温度ヲ
 異ニスル者アリ
 熱勢未^タ甚^ク熾^クナラザル者ニメ一日中ニ之ヲ檢ス
 ルニ其度ノ差異少ナレハ其熱モ亦多カラズト
 ス若シ温度高クメ其差異ヲ見ルト少ケレハ熱
 ノ熾盛ナルヲ知ルベシ
 合併症アルカ或ハ不整ノ經過ヲナス症ニ於テ
 ハ著シキ差異ヲ來ス者ナリ
 一晝夜間ニ在リテ温度ノ差ヲ顯ハス者ヲ總稱
 メ熱ノ往來ト曰フ今再ヒ之ヲ分テ左ノ四期ト

三

第一發作期 ユキサセル ハ體温ノ真ニ増進スル時
 第二緩解期 レミツ ハ體温ノ真ニ下降スル時
 第三極進期 レミツ ハ一日中體温ノ最^ニ高度ニ達スル
 時
 第四弛熱期 レミツ ハ一日中温度ノ最^ニ減退スル時
 右四種ノ時期ニハ各若干ノ時間ヲ費ス者ナリ
 熱勢ヲ審定スルニハ其期ノ長短ト一晝夜間ノ
 差異如何トヲ察セズンバアルベカラズ
 一晝夜間温度ノ差異ヲ定ムルニハ最モ高昇ノ

六

新撰 卷之三
 〇三十一
 綱目 藏板

言游持谷 卷之二 四

度ト最モ低降ノ度トノ間ノ数ヲ以テ算スル者
ニメ頗ル差等アリ而メ其差異ハ日々高昇スル
者ト低降スル者トアリ其差ヲ知ルハ預後ニ於
テ太喫緊ナルモノナリ
通常己ニ高热ヲ有スル者ニ一日中温度ノ差
異少キ者ハ病ノ初期ナルカ或ハ合併病アルカ
ヲ徴シ又病機ノ亢盛期ニ當リ其熱解散スル片
ハ凡テ病ノ恢復ニ赴クカ若クハ全癒ヲ証ス而
メ其熱ノ弛解數日間連續スル片ハ愈快癒ニ至
ルヲ知ルヘシ然レ其弛解持續セスレテ再ニ發

七

熱スル片ハ其病ノ再發スルカ或ハ他ノ合併病
ヲ誘發スル者ト決定スベシ
熱ノ定型ヒール
タイプトハ連日經過セル熱ノ現況ヲ謂
フ
一晝夜間ニ計ル所ノ熱度ノ差異半度ニ出テサ
ル者ヲ名ケテ稽留熱フエプリス
コンチヌアト曰フ又其差ノ稍
多キ者ヲ次稽留熱フエプリス
アコンチヌアト曰ヒ一度以上ノ差
ヲ來ス者ヲ弛張熱フエプリス
レミツチニスト曰フ
間歇性熱定型トハ發熱時ト免熱時ノ差異判然
交換スルヲ以テ他ノ種屬ニ異リ而メ之ニ整不

診新集 卷之二 三十一 附載

整ノ別アリ其發作時間ノ漸々近接スルヲ進行
 性ノ間歇熱 テキアス、インテルミツ ト謂ヒ之ニ反スルヲ退
 行性間歇熱 テキアス、インテルミツ ト謂フ其他日發熱或ハ
 三日熱四日熱ト稱スル者アリ亦之ニ屬ス
 短熱 フエア 或ハ一日熱ト唱フル者ハ微ニ熱ノ形
 状ヲ顯ハス者ニメ其他熱ト異ナルハ持續ノ甚
 タ短ク故ニ二時ヨリ二日間ニ解散スル者ナリ
 常トス且屢非常ノ高度ニ達スルヲ以テナリ
 上ニ至ルヲアリ フエアリス、コンチ ハ間歇ナク持長スル者
 持長性稽留熱 フエアリス、コンチ 又ス、コンチチニス

六

ニ以病ノ増進其極度ニ達スルヤ熱モ亦從テ下
 降スルヲナク常ニ掩滯スル者ヲ謂フ然レ又甚
 稀ニ一時下降シテ常度ニ至リ或ハ極メテ稀ニ
 其以下ニ降ルヲアレハ暫時ニメ再ヒ高度ノ本
 位ニ至ル者ナリ
 間歇性回歸熱 インテルミツ、チーレンデ、ラン ハ高熱間ニ屢
 或ハ常度ノ温ヲ挾ム者ナリ
 定型病ハ一定ノ成規ヲ以テ經過スル者ニメ熱
 度モ亦常ニ之ニ從フ者ナリ之ニ屬スル病ハ即
 チ腸室扶斯發疹性室扶斯、回歸熱、麻疹、單性猩紅

熱痘瘡特發格魯布性肺炎等ナリ
不定型病ハ一定ノ正規ナク經過シ其熱ニ於テ
モ亦定期ナキ者ナリ此ニ算入スル諸病ハ急性
傷麻質斯腦膜炎耳下腺炎チフテリチマ漿液膜
諸病心内膜炎肝臓炎脾臓炎腎臓炎等是ナリ
定型病ト不定型病トノ間ニシテ畧ホ定型病ニ類
スル者アリ復雜性ノ猩紅熱水痘類麻疹膿毒病
丹毒扁桃腺アングナ間歇熱等之ニ属ス
熱性諸病ニ於テ熱ノ經過スル時期ヲ左ニ區別
ス但シ其時期ハ精密ニ境界ヲ定ムル能ワサル

六

七

八

九

第一 發現期 イニチアル 熱ノ將ニ發セント
第二 熾期 フアスチ 第三 解散期 デラエルウ 第四 恢復期 レコンワレ
第五 臨終期 フレモルター
又熱ノ常溫ニ歸セントメ其未タ全ク復セザル
時ヲ減退期 スタレユム ト謂フ但シ此期ハ多クモ一
二日間持續スルヲ常トス其他不明期 スタレユム ア
稱スル者アレハ減退期ニ於テハ著シク體溫ノ
増進ナキヲ以テ之ト區別スベシ
減退期ノ速ニ經過スル者ヲ急性分利 クリ ト名ケ

三十三 痲痘

久レキモ三十六時間ニ出テサルヲ云フ又之ニ
 及レテ此期ノ長ク持續スル者ヲ慢性分利^{リキ}ト
 名ク[大約三日ニメ解熱スル者ナレト稀ニハ尚
 持久^{ハ数日ヨリ一週或スルアリ}]
 臨終熱度尤進ハ劇性熱病ノ終リニ目撃スル所
 ニメ其熱甚々強劇ノ高度ニ進ハ者ナリ例之ハ
 腸室扶斯、發疹性室扶斯、麻疹、猩紅熱、痘瘡、膿毒病、
 其他日射病、肺炎、丹毒、急性倭麻質斯、心内膜炎、腦
 膜炎、腦髓炎、破傷風、癲癇、及ヒ^コステリ^リ等ニ於
 ケルカ如シ但シ此等ノ病ハ數時間ニメ攝氏四

三

四

十四度七五ニ至ル^ルアリ
 已ニ心臟及ヒ呼吸作用遏止スルノ后ニアリテ
 モ概^子數分時乃至一時間溫度ノ持續シテ稍昇騰
 スルアリ之ヲ名テ死后ノ溫度昇進<sup>ポストモルターレ、テン
 ベラチユールスタイゲ</sup>
 クト曰フ

○咯痰論

咯痰検査

呼吸器病ニ於テ其氣道ヨリ排泄スル物質ヲ檢
 スルニハ先ツ之ヲ痰壺中ニ蓄ヘ其分量、色性、稀
 稠、臭味等ヲ日々詳悉セズンバアルベカラズ

八五

今此検査ヲシテ精密ナラシメント欲セバ即チ
其排泌量ノ多少ヲ定メ或ハ咯痰ノ容易ナルカ
困難ナルカ又咳嗽頻發ノ後ニ咯出スルカ或ハ
偶咯痰スルカ將續々咯痰スルカ或ハ其蓄積ス
ル痰液發咳ニ由テ一頓ニ咯出スルカ或ハ夜間
ニ多キカ日中ニ多キカ早起ノ時ニアルカ臨臥
ニ於テスルカヲ訊問シ次ニ其性流動スルカ濃
厚ナルカ無形ナルカ粘稠ナルカ膠狀ナルカ凝
塊ヲナスカ貨錢狀ヲナスカ線狀ヲナスカ或ハ
多少空氣ヲ含ムカ泡沫アルカ且其質一様ナル

カヲ知り兼テ其色白色ナルカ灰白色ナルカ黄
色ナルカ緑色ナルカ赤色ナルカ銹色ナルカ
褐色ナルカ黒色ナルカ將々無色ナルカヲ注目
シ其他漿液様ナルカ漿液膠狀ナルカ純膿ナル
カ或ハ血線アルカ血點アルカ又ハ血液多量ヲ
混スルカ或ハ痰壺ヲ傾クルモ壺底ニ粘着スル
カ又ハ凝塊ヲナシテ滴落スルカ或ハ痰液中ニ
混在スル纖維素ハ膜狀ノ碎片ヲナスカ或ハ管
狀ヲナスカ或ハ樹枝狀ヲナスカ且水中ニ傾寫
スル片ハ水面ニ浮泳スルカヲ精察スベシ

又其化學上、反應適性ナルカ酸性ナルカ又ハ其臭甘ナルカ酸ナルカ或ハ腐敗臭アルカ脱疽状ノ臭アルカ又ハ無味ナルカ鹹味ナルカ甘味ナルカ苦味ナルカ惡味ナルカヲ檢知スベシ
 咯痰ヲ取り顕微鏡下ニ照見シテ其中ニ剥離セル上皮細胞アルカ
磚狀上皮ハ口腔及咽腔ヨリ來ル者ナリ或ハ粘液球、膿球、原基小核、攢簇顆粒多核細胞、細胞核、脂肪、血球、彈力纖維、或ハ胆脂、磷酸アルモノヤ苦土、ヘマトイン
血紅素ノ結晶及エヒノコックス胞ノ碎片、滴蟲、菌黴、又ハ食片

肉纖維、植物組織、澱粉顆粒等ヲ混有スルヤ否ヤヲ精細ニ檢査スベシ

○出血論

凡テ出血ハ血管ノ破裂ヨリ來ル者ニメ開口腔内ニ溢出シテ其腔口ヨリ外部ニ漏洩スルアリ或ハ無口ノ腔内ニ滯留シテ外部ニ流出セザルアリ或ハ織質中ニ滲滯スルアリ故ニ其景状ニ從テ諸種ノ名稱アリ即チ左ノ如シ

- 〔甲〕 エクヒモルセ組織間ニ出血ノ黄黒
- 〔乙〕 スギラ大量ノ
- 〔丙〕 エキストラワサート大量ノ

其他血管出血稍大ナル血管ヨリ出血スル者及毛管出血毛細管
 血ノ出是ナリ
 外部ト交通セル腔内ノ粘膜ハ殊ニ出血シ易シ
 其由ハ最モ多ク血管ヲ富有シ且其組織寛鬆ニ
 メ充血シ易キカ故ナリ
 又出血勢力ノ強弱ニ從ヒ滴血、流血、及射血ヲ區
 別セリ
 血液ノ深紅色ニメ迸流スル者ハ即チ動脈出血
 ニメ暗紅色ヲナシテ流出スル者ハ靜脈出血ナ
 リ而メ此二種ノ血液或ハ稀薄ニメ流動シ或ハ

稠厚ニメ凝泣シ或ハ純粹ニシテ他物ヲ混セサ
 ルアリ或ハ他ノ分泌物及排泄物ト混和スルア
 リ或ハ只他質ヲ染色スルアリ
 口腔或ハ鼻腔又ハ口鼻兩腔ヨリ出ル所ノ血液
 ハ其源許多ナリ即チ衄血エビスハ鼻粘膜ノ出血
 ニ由リ口腔ヨリ出ル者ハ齒齦、齶齒、舌、軟口蓋又
 ハ咽頭、胃管、胃、或ハ氣管支及肺粘膜ノ出血等ニ
 由ル者ナリ
 出血ヲ來ス所ノ源ヲ尋ヌルニ或ハ直ニ視官ヲ
 用ヒ或ハ咽喉鏡ヲ以テ鼻、口腔、咽頭及ヒ喉頭ノ

粘膜ヲ精細ニ検査シテ而メ后決定スルヲ一般ノ通則トシ又其出血ハ咳嗽ニ由テ發スルヤ或ハ咳嗽後ニアルヤ或ハ噎咳ニヨリテ發スルヤ或ハ痰ト共ニ咯出スルヤ或ハ突然ニ發スルヤ又ハ大量ナルヤ或ハ劇シキ動作ノ際ニ於テスルヤ其後ニアルヤ或ハ嘔吐ニ由リテ發スルヤヲ詳ニスベシ且其色鮮紅ナルカ暗赤ナルカ或ハ其反應酸性ナルカ鹼性ナルカ或ハ血液中泡沫ヲ混スルカ或ハ痰中ニ血線ヲ見ハスカ或ハ血臭アルカ小塊ヲナスカ或ハ流動セルカ凝泣

セルカ或ハ純血ナルカ粘液又ハ膿汁等ヲ混スルカヲ檢スヘシ若シ口内及鼻道ヨリ血液ヲ洩出スルニアラハ兼テ其肛門ヨリモ排泄スルヤ否ヤヲ探知スヘシ都テ血液鮮紅色ニテ泡沫ヲ帶ヒ且其反應鹼性ニメ咳嗽ニ次テ發スル者ハ氣道ノ出血ナルヲ証スヘク若シ其色暗赤ニメ酸性ノ反應ヲ顯ハシ且食片ヲ混スルハ胃出血タルヲ徵スヘシ肛門ヨリ出ル血液大便ト密和メ糞兒狀ヲ呈スル者ハ胃血ナルヲ知ルヘク若シ大便ニ混和セ

スメ只其周圍ニ塗附スル者ハ腸殊ニ大腸出血
 タリ
 其血液ノ一分ヲ取り之ヲ顕微鏡下ニ照見レテ
 其血球圓形ナルヤ動物ノ血球卵圓或ハ楕圓
 ナルヤ鳥類、魚類、血球類及他粘液球、膿球及ヒ顫
 毛上皮ヲ有スルヤ顫毛上皮ヲ混スルハ或ハ脂
 肪球及澱粉球、筋纖維片或ハ他ノ動物組織并ニ
 螺旋管或ハ植物細胞其他植物組織成分等ヲ混
 スルヤ以上胃血ト者ヲ細ニ検査スヘシ
 尿血ハ腎輸尿管、膀胱、尿道等ノ出血ヨリ來ル者

ナリ即チ血液尿中ニ溶解混和シテ一樣ノ赤色
 ヲ呈シ且其尿ヲ靜定スルモ全ク細粉狀ノ沈渣
 ヲ生セス若シ之ヲ生スルモ極メテ僅少ナルモ
 ノハ腎出血ニメ尿中長絲狀ヲナセル凝泣物ヲ
 混スル者ヲ輸尿管出血トナス若シ血液尿中ニ
 混和セスメ凝塊ヲナスカ或ハ其一分稍溶和ス
 ルモ之ヲ靜定スレハ直ニ尿ト分解スル者ハ膀
 胱出血ニメ又其血液尿ノ排泄時ニ非サルモ漏
 出或ハ滴出シ且尿中ニ在テ混和セサル者ハ尿
 道出血ナリ肛門腔及子宮ノ出血ハ視診ヲ施シ

診斷捷徑卷之二終

且手指ヲ挿入シテ其原由ヲ覺知スルヲ得ベシ

明治十年八月廿四日 版權免許
同十一年三月十四日 出版

第四大區七小區
本郷森川町四十二番地
東京府平民
岡 玄卿
翻譯出版人

診斷捷徑卷之二終



